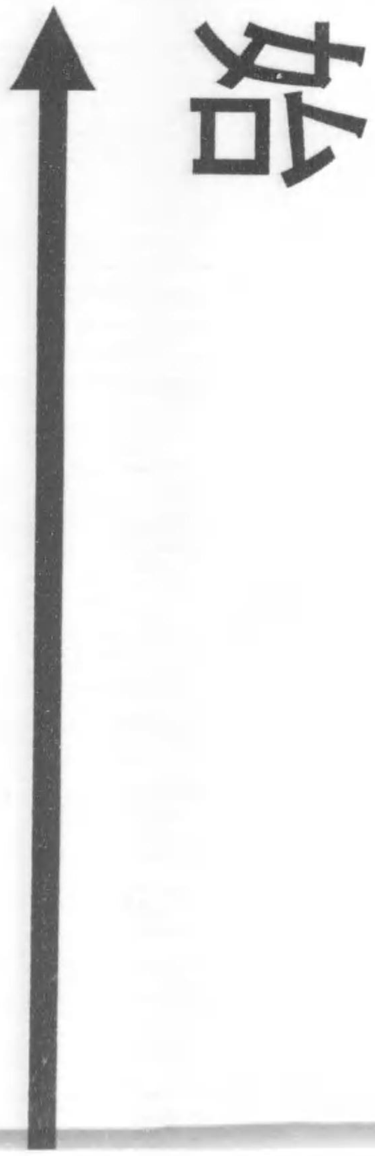
325
166



トエ8A-17

166

松村介石著

天地人

東京 警醒社書店

325-166

天地人

自序

題して天地人といふ、天に屬するものは宗教となり、地に屬するものは政治及社會となり、人に屬するものは修養となる。然則、此書亦三才を盡したるものと謂ふべき歟。

然り、然れども、是れ予が天地人に屬する意見の一班を揚げたる而已。さかして又た新著に非ず、嘗て「道」誌上に載せたるものを蒐集したるものとす。乃ち新著に非ずと雖も、而かも予が精神を披瀝して毎月天下に訴へしもの、文や拙、取るに足るべきもの

あらずと雖も、此「道」や實に我輩の生命たり、乃ち此「道」に掲載するもの、一言一議と雖も苟くもせず、讀み來て事件の舊に屬するものなきにあらずと雖ども、是れ却つて當時を回想し、之を今日に當て嵌めて猶其の新なるを誇らんと欲するもの。書肆の請に委せて、茲に一言天地人に序すと云爾。

因に曰ふ、書中、「日本教會」とあるは、其後に改稱したる「道會」の事と知るべし、而して予の宗教觀が、漸々と基督教より離れて、いよ〳〵道其物に進みつゝあるを見るべし、議論の變化せしにあらず、進化せしなり。

大正元年新秋

大森の里にて

著者識

天地人目次

政治

日本興亡の研究問題……一
日本の前途……七
青年政黨論……一〇
當局漸く醒む……一九
伊藤公……二一
青年諸君に檄す……二五
支那と日本……三五
心得べき三教……三七
國民教育の主眼……四〇

國民的大理想……四八
個人的理想……五六

宗教

他教と基督教……六二
明治基督教の失敗……六九
輸入的基督教の終焉……七五
原料的基督教……八三
聖書改造論……九〇
我黨は基督教會に屬するか將た屬せざるか……九四
東西道德の長短……一〇四
神人合一の妙趣……一一〇
愛隣の主張……一一四

精神界の征服者……一一九
聖靈の活動……一二五
事業的聖靈……一三二
神……一三五
祈禱……一六一
不思議の現象と我信仰の立場……一六九
道と宗教……一七七
宗教の各方面……一八三
現世と來世との相違……一九〇
宗教の人……一九五
宗教と異能……一九七
我道友……一九九
日本教會の覺悟……二〇一

サタンよ退け……二〇三
我道友の宗教觀……二〇七
ソクラテス教……二〇九
正統派の罪惡……二一〇
回教……二一四

社會

迷信の復興……二一七
一少女提督を感泣せしむ……二一九
米艦隊の歡迎……二二〇
自然主義の害毒……二二一
明治四十三年を送る……二二三
日本現時の諸宗教家を評す……二二〇

日糖事件……二四五
酒匂常明氏の自殺に就て……二四八
横井時雄氏に就て……二五五
快男子ルウズヴェルト氏……二六七
自殺論……二七〇
解嘲一束……二七五
舊人と新人……二八五
宇内の二癖物……二九〇
哀れなる風潮……二九二

修養

不動の心……二九四
天命を知る……三〇〇

目次

達人の大觀……三〇七
是れ我が任也……三一四
吾人の要求……三一九
人物三段……三三〇
活道德……三三四
獨立自助主義……三三六
吾人の敵……三三八
修德の苦心……三四四
煩悶驅逐法……三四七
秋郊散策……三五九
人格の試驗……三六一
詔勅……三六五
新年の覺悟……三六六

目次

偶感一滴……三七四
男女の交際……三八四
智、信、行……三八七
雄辯に就て……三九五
友人四則……四〇三

終

天地人

松村介石著

―政治―

日本興亡の研究問題

日本社會も此儘にて放棄し置かば、那邊まで腐敗しゆくべきか。又た何れの日、如何なる轉機によりて革新せらるべきか、將た終に滅亡すべきか、是れ目下大研究を要する問題なり。今之を歴史に徵するに、今日の日本は、宛も英國のジョージ二世時代に相當す。當時英國は世界に大發展を遂ぐると同時に、通商貿易に成功し、國民を擧げて金儲の一方にのみ狂奔せしめ、宗教道徳の勢力の如きは、

地を拂ふて去るに至れり。尤も宗教道德と金儲、此二者必ずしも並行し難きものにあらず、然れども前にはクロンウエルの政治に懲り、今や只だ利是れ求むる商業家となりたる英國民は、復た宗教道德に耳を傾けず、而して金銀に耳を傾むくるべくもあらず。已に宗教道德と奢侈と淫靡と腐敗と墮落の社會を現出すべきは世界より集り來る。於此乎奢侈と淫靡と腐敗と墮落の社會を現出すべきは勢の免れざるところなりき。日本は未だ當時の英國の如き大發展大成功を遂ぐるを得ず。然れども國民を擧げて金儲の一方にのみ狂奔せしめつゝあるは事實なり。官吏が會社員に轉じ、商人が爵位を受け、學生が生活を目的として學問するに至れる如き即ち是れなり、而して奢侈淫靡の風亦た大に起らんとす。更に又た士族の階級崩落し、從て武士は食はねど高楊子の氣品の嘲笑せらるゝと同時に、復た節義を重んぜざるに至れることは、宛も當時の英國がクロンウエル時代の反動を受けたるに類す。

然則英國は如何にして、其腐敗より救はれしか、之を解かば、我日本をも解くを得べし。英國には其腐敗の絶頂に當りて、政治界にピットは出で、宗教界にウエスレー現はれ、此二傑の爲めに、一大革新の轉機を得たり。ピットは愛國黨を率て當時の腐敗宰相たる、即ち我國の桂總理に類するワルポールを斥け、己れ代て天下を匡し、遂に狂瀾を既倒に回へしぬ。ウエスレーはオックスフォード大學より起り、神聖倶樂部の上に、靈火を顧び降し、一生の間に二十二萬五千英里を跋涉し、四萬以上の說教を二十人以上二萬人以下の聽衆に試み、遂に英國社會を悔改せしめぬ。勿論ピット、ウエスレー二人のみの力にあらず、縱令ひ腐敗墮落せしとは云へ、當時の英國社會には、猶未だ古來より涵養し來れる靈氣の熄滅せざるものありき、こゝを以て此二傑が巨手を揮て之を煽ぐや、直に炎々と燃へ揚がりぬ。想ふに我國にも今猶ほ古來より涵養し來れる武士的精神の熄滅

せざるものあつて存するなり、然則茲にピット出で、ウエスレー起らば、必ずしも狂瀾を既倒に回すること難しとせず。吾人は日夜刮目其人の出んことを待つゝあるものなり。然れども研究問題は猶ほ依然として研究問題なり。果して我國にピット起るべきか、是れ第一問なり、而してよしやピット出でたりとするも、果して能くワルポール若くはニューカッスル黨を驅逐し得べきや否や、是れ第二問なり。ピット如何に偉人たるも、デヴオンシアイアー公の如きが、誠意以て之をジョージ王に推薦するあるにあらずんば、其手腕を揮ふ道なかりしなり。我國に於てデヴオンシアイアーたるもの果して誰ぞ。商人と結托して營利に拔目なき井上侯なるか、濫行に有名なる伊藤公なるか、風流宰相の聞へ高き西園寺侯なるか、將た大相塲師の噂ある桂侯爵なるべきか、否々是れ皆ピットを推薦すべき人格の人にあらざるなり。然則我國民は英國民の如く、全國を擧げて

ピットを推薦すべき壯擧に出で得るや否や、當時の倫敦市會は其決議案を天下に發表して曰く、今の時に當りて、能く內政を刷新し得るものは、ピットの外あるべからずと云々、而して全國の市町村會も、亦同じく倫敦市會の決議案に和し、速にピットを大宰相の位に擧ぐべしと絕叫せり。我國の市町村會亦能く此くの如く正義的大人物を廟堂に立たしむべく決議し得べきや否や。更に又我國の宗教界を見るときには、ウエスレー時代に髣髴たるものなしとせず。誰か起てウエスレー兄弟たり、又たホイットヒールドたるべきものぞ。吾人は日夜其人の出でんことを翹望しつゝあるものなり。然れども一教會に牧師たり、一校に長たるものあるも、未だ全國を睨むものあるを見ず。此間の消息終に如何か決すべき。之を要するにピット出でゝ其手腕を揮ひ得べきか、ウエスレー出でゝ其大活動を爲すべきか、今猶ほ大疑問たらざるを得ず。然則日本の腐敗墮落は畢に

如何なる氣運に際會してや救はるべき。論者曰く心配に及ばず、物極まれば必ず變ず、將に目を醒す時あるべし、慷慨は用なし、各々其の從事するところに盡さんのみと。而かも吾人を以て之を視るに、此言や、屢々西班牙の憂國者が受けしもの、清國若くは朝鮮の慷慨家が受けしもの、佛國革命以前の樂天家が口にせしもの、幕末の當路者が發せし言として有名なるもの、而して此の所謂『今にどうかなるだらう』との樂天主義にて、其國を亡ぼしたるもの古往今來比々皆以て然らざるはなし。我等は古今萬國の歷史を閲みし來り、彼の一時天下を併呑したる西班牙國が、腐敗墮落の結果、十八世紀に至り、カルヴァルヨの手腕を以てするも、亦た奈何ともする能はず、十九世紀に至り、カスチリオの賢相を以てするも、終に挽回の希望なかりし衰運に陷りたるを想ふ毎に、未だ曾て我國の前途を悲觀せずんばあらざるなり。兎にも角にも、古今萬國の歷史を閲みし來り

て、國家元氣の消長が國運の隆替に關し、腐敗墮落の風俗が、終に其國家を滅亡に陷れたる實跡あるを熟知するものは、『今にどうかなるだらう』との樂天說に和することは能はざるなり。於此乎、吾人は茲に我國の興亡如何の研究問題を提げて、之を江湖に質さんと欲するの情に禁へざるなり。

日本の前途

一日大隈伯を訪ふ。伯曰く。近時歐米より來航する觀光客の本意

は、風物に在るよりも、寧ろ青年に在るものゝ如し。予を來訪する外客の質問、幷に其語氣に由りて之を知る。古昔は子產天下を歷遊し、諸國の風俗を視、音樂を聽き、青年の氣慨如何を察して、其國の興廢存亡をトしたりき。今日の外客も、亦子產の類たる疑ひなし。君や青年の薰陶を以て任ずるもの、日本の前途に大責任を有すと。予の曰く宗教教育は是れ吾人の任ずるもの、而かも伯や政治を以て任せらる。敢て問ふ、目下我國文部の方針、幷に其學制を如何とや見らる。予は近時文部亡國論を唱へんと欲す。先づ智育の上より之を云はんか、帝國大學は青年教育の高巔也、而かも帝國大學を卒業したるものにして、讀書力のブアーなる眞に驚くべきものあり。其專攻の學を除かば、殆んど無學に均しきもの尠からず。語學の如きも亦た然り、外人に會ふて自由に其思想を通じ得る者甚だ稀れなり、而して其學年徒らに長く、其小學より大學を卒へんには、人生五十

の過半を費し、大切なる有爲時代を死せる學窓の下に終へしめ、曾てビット、ウエスレー等の人材を出す能はず、嘆ずべきの極也。更に德育より之を云はんか、是れ全くゼロなり、桂總理の風俗を說き、小松原文相の品性を說くあるも、吾人が嘗て論ずる如く、鳴銅や響く鈸の如きのみ。若夫れ此學制。此教育方針にして改まらずんば、學者をも出す能はず、精神家をも起す能はず、我國青年を殺すものは文部省たらんのみ、而して已に青年を殺すものを文部省とせば、我國を亡ぼすもの亦た文部省なりと謂はざるを得ず。伯や政治を以て任せらる。敢て伯の高見を聽かんと。於此乎伯は手を動かし足を擧げ、議論風發、文部亡國論に大賛成を表し、慨世の氣眉宇の間に動く。

青年政黨論

太甚しい哉、我國青年の國家心を喪ひたることゝや。顧みれば明治十二年三備の有志が國會開設請願の議を決し、檄を四方に飛ばして同志を募るや、天下靡然として之れに應じ、翌明治十三年には、全國の各府縣より、續々上京して、國會開設の請願書を當局に呈するもの引きもきらず、之れと同時に、中江篤介はルーソーの民約論を祖述し、西園寺公望は東洋自由新聞を發行し、板垣退助は自由黨を

組織し、大隈は諭旨免官となりて野に下り、其混雜や言ふべからず。此時に當りて天下の青年は、皆腕を扼し、眼を瞋らして、藩閥政府の横暴を詈り、國家の爲めには其身を愛まずと意氣卷きぬ。左れば政府も亦た之に應じて、直に集會條例を發布し、政社の聯合屋外の集會、陸海軍人及び公私學校教員生徒の政治的集會に參加するを禁じ、全國を擧げて政治的戰鬪の街衢と化せしめぬ。予等は當時專ら傳道に從事し世上の出來事を泡沫視し、彼等は到底地獄に往くべきもの、滅亡の子の爲す一現象のみ、官と云ひ民と云ふも、偕に憫れむべき人類哉と、一向其等に頓着せざりしも、亦た尙當時の青年（大石、犬養、島田、尾崎、星等も皆二十以上三十歲迄なりしならん）が處々に政談大演說會を催し、其大看板と共に雲霞の如き群衆を引きつゝありし時代を記憶す。明治二十二年予の北越學館に赴くや、當時條約改正の議大に起り、國會開設の期限もいよ〳〵明年に迫り居

たれば、有望なる學生にして、時の國家的問題に驅られ、自由黨の壯士に化するものも尠からざりしかば、予は大に其の不心得を論じ、代議政體の國家には知識を要す、學問を要す、肩を怒らして歩し、ステッキを振り廻して言り、天下國家を云々して、大器晩成を期すべき學業を怠る如きは、今日の諸君に取らざるところなりと論したるを覺ふ。其れ然り、然るに明治二十七八年の役となるや、形勢頓に一變し、全國の民衆皆奮然として起ち上がりしも、此際比較的冷淡なりしは學生なりき、明治三十七八年の役に當りても、非戰論に和したる者は青年なりき。田舍の翁媼は其子孫に戰死を勸めて、其身を顧みるに暇あらず、老朽せる維新の元勳も、俄かに往時の青年に復り、北天を睨み南海を望んで氣遣ひしも、彼れ青年學生は、却て冷淡の態度を持し、小說を繙き、金偖を念じ、世の所謂る成功者を尋ねて立身出世を心掛けぬ。然而して今や日糖事件起り、政界の腐

敗絶頂に達して、國家將に危急を告ぐるに拘はらず、青年學生の間に、慷慨悲歌の士を見ること難く、有れば却て愚視せられんとす。日本青年の國家心を喪ひたることも亦た太甚と謂ふべき也。

其れ然り、然れども是れ怪しむべきにあらず、由て來るところあるなり、民間の志士は、多年の奮鬪に刀折れ馬斃れて復た奈何ともすること能はず、或者は落武者となり、或者は捕虜となり、或者は盜賊と化して、終に今日の醜態を演ずるに至りしかば、最早や後進者をして其蹤を追ふの勇氣なからしめたるなり、是れ其一。二十七八年の役に當り、案外に冷淡なるは青年なりと聞き、伊藤博文公慨して曰く何んたる意氣地なき青年ぞ、かゝる國家の大事に當りて尙ほ奮起する能はざるかと。然るに鳥尾得庵之を聞き哂ふて曰く、夫れは伊藤さんがわるいよ。サンザ人を乾物にして置て、今更泳げよとは情けないと。然り、政府は多年天下の青年學生を拘束し、勉て國

家問題に觸れしめず、畢に青年は、政治に容喙するものにあらずとの觀念を彼等に抱かしむるに至り、國家思想に對しては、殆んど乾物と成り了せしなり、是れ其二。次には生活問題の爲めなり、維新の青年には衣食の憂なかりき、明治初年の青年には、尙ほ兵站の供給者ありき、然れども今日に至りては、最早や其人を得ること難く國家問題よりも糊口問題に惱殺せられ、偶々國家に志を抱くものあるも周圍の我れに和せざるより、終に馬鹿々々しくなりて、其志を放棄し去るもの、比々皆以て然らんとす、是れ其三。其れ然り然りと雖ども最早理由を並べて袖手傍觀すべきの時にあらず、朽ちたるものは是非もなし、死したるものは鞭つも甲斐なし、たとひ意氣の衰へたるあるも、尙ほ青年に俟たざるべからず。維新の元老は已に其使命を成し終はれり、明治の政客も亦た已に其使命を成し終はれり、而して今後の使命は更に青年の頭上に落ち來れりと覺悟せざ

るべからず。青年諸君！諸君は煩鎖の學制に誤られ、着實主義の說法に魅せられ、老て後天下を以て任せんとするか、歷史を繙き見よ、傳記を披き見よ、凡そ天下の大業は、廿歲以後より三十歲前後の人を以て創められざるはなし、孔明の蘆を出でたる、ナポレオンのアルプスを越へたる、ピットの青年愛國黨を起したる、孰れも皆三十歲以前に在り、否、之を海外に求むるに及ばず、我元老然るなり、我明治の政客然るなり、伊藤俊介、大隈八太郎而して前述の諸氏、皆是れ十七八歲より天下を睨んで起ちしものなり。斯く云はゞ、人或は謂はん、彼等は亂世亂後に生る、平時を以て論ずべからず、否々然らず、今日も尙ほ亂世たるを免れざるなり。一び門戶を宇內に開くや、吾人は直に亂世に仲間入せしなり、日露戰爭は漸く數年以前に結びたるにあらずや、ローズベルトの排日論は僅々數週以前に現はれたるにあらずや、英獨の掛引き、露淸の謀略、盡く吾人の

頭上にかゝらざるなし、然而して我國外交の振はざる、到る處に國力發展の阻害を見る、之を平時と謂ふべきか、加之一び眼を內國に轉せば亂世の徵證や歷々尙ほ指すべきものあつて存す。文部學制の青年を殺しつゝある、學閥の割據する、官商の賊を働く、蒼生の塗炭に苦しみて、日々の新紙に慘事を報じ來る、皆是れ亂世の徵證にあらずや。然るに治者は情實に負けて、憂慮に過ぎ、世は益々腐れ行くのみ、是れ豈維新當時の狀態にあらずや、是豈ワルポール時代の英國にあらずや。然則青年諸君、此際八太郎ともピットともなり、風雲を青年の間に卷き起すべき秋にあらずや。

予は今諸君に青年政黨を起さんことを勸む、是れ今日の急務なりと信ず。尤も物本末あり、事終始あり其順序方法に至りては、大に考慮を要すべきものあり、先づ第一人を治めんと欲するもの、先づ自ら治めざるべからず、西鄕の天下を以て任ずるや、先づ禪を聞き、

陽明を學び、全く無私の境に其神魂を置けり、木戸も然りしなり、勝も然りしなり、大久保公の殺されしとき、家に些少の蓄財だもなかりし。即ち諸君は先づ此處の修養より入らざるべからず。第二、外は古今の歷史、宇內の形勢に通じ、內は各社會の眞相を熟知し、內外の情實を審かにせざるべからず、即ち先輩に聞き、學者に質し、先づ知識的の人たらざるべからず。第三、着手の順序として演說より始め、次で文筆に移るべし。第四、最初は多數を望むべからず、今日の憂は一事を起し、一業を企つる每に、必ずバチルスの侵入するに在り、固より淸濁併呑の度量を要すと雖ども、先づ政治を主眼とする青年倶樂部の如きものを起すべし、而して此倶樂部に於て右に述ぶる如く、修養と學識と辯論と筆力に心を用ひ、其幹部には人格の高き青年を集むるに勉めざるべからず。第五、右の趣意にて東京に本部を置き、次第に同志を地方に募り、所在修養的に成長し行

かば、其勢力はみる〳〵侮るべからざるに至らん、然れども若夫れ徒らに速成を望み、誰れでも來いと云ふが如き態度に出でなば、忽ち破落漢の巣窟となりて自滅すべし。

之を要するに吾人は不朽の道を説て、專ら宗教の方面に努力するものなりと雖ども、若夫れ愛隣の主張より云はゞ、此際何人か政治の革新を圖るもの出でざるべからず、史を把て案ずれば、宗教も、教育も、實業も、皆盡く政治の運轉如何によりて消長するものなり、左らば吾人とても政治を度外視する能はず、即ち青年政黨論を草して以て、國家心を喪ひつゝある青年諸子に質さんと欲す。

當局漸く醒む

豫言者を殺して、而後に其墓を建て、神子を十字架に懸けて、而後に、我等救はるべきために何を爲すべきや」と問ふ、世の近眼者流は皆概ね然るなり。我國民の思想の亂雜に赴くべきことは、吾人が三十年前より警告しつゝありしところのものなり。我國の宗教倫理に變動を來し、我精神界の危機に瀕しつゝあることは、吾人が夙に絶叫したるところのものとす。然るに世の識者並に當局等は、久しく

吾人を冷笑して止まず、今に於て俄かに神社を敬せよと説き、祖先を祭れと勸め、遽々然として莊周が胡蝶の夢より覺めたるが如くに騷ぎ廻る、何んたる痴態ぞ、而かも是れ詈るべきに非ず、其醒めざるに勝る萬々なるを以てなり。敢て問ふ諸君は吾人に遲るゝこと三十年にして醒めぬ、知らず更に今後の三十年を前知し居るや否や、吾人は諸君が啻に三十年後を前知するのみならず、百年千年の後までをも前知して以て、吾人と與に不朽の大道を我國に樹立するの達眼者たらんことを望むものなり。

伊藤公

伊藤公に就ては論評已に盡きたり。因てこゝには唯だ余輩一個に關するものゝ追憶にのみ止むべし。予の伊藤公と會談せしことは、前後三回のみ、其の最初に公に會ふや、公の曰く、君は我輩が一向青年の爲めに盡さぬと謂ふそうだが、ナニ盡して居るよ、某も青年時代より予の引き立たるもの、某はしかじか某はかく〳〵と説明せられたり。是れ予が友人を通じて、大隈伯は何んでも喜んで吾人の

依頼を諾し、善く青年の爲めに盡さるゝも、伊藤公は雲間に隱れて一向後進の爲めに盡して下さらぬと傳言せしに由るなるべし。又曰く、こゝに君等の知らぬ事で、大に我輩に向ふてお禮を謂はねばならぬことがある、かの憲法にある宗教自由の一條は、實に我輩が死力を盡して反對黨と戰ひ、漸くにして贏ち得たるもの、君等は恐く知るまい云々と、是れ亦た説明せられたり。予當時公と相對して、つら〳〵公の人物如何を視察せしが、第一に浮べる感想は、アゝ之れは善人(グードマン)であるとの事なりき。第二は、始終シガーを吹きつゝ、少しく頭を横に傾け、聊か肩を斜に聳しめ、得意滿面に溢れて、其手柄談を吹聽せらるゝところ、隨分虚榮心の人ぞと思はしめぬ、尤も虚榮心にも厭ふべきあり、可笑しきあり、愛すべきあり、而して伊藤公の如きは其愛すべき部類に屬する人ぞと思はしめぬ。第三は愛すべくして厭ふべきところを見ざりしも、更に欽慕憧憬の念を起す

能はざりしこと是れなりき。始めて大隈伯に會ひしときは、『爾來屢々來てみたい』と思ひき。副島伯に會ひしときは、『此の老人は學ぶべき人である』と思ひたりき。勝伯に會ひしときは、最初は此の老爺失敬な奴なり、最早や來ないぞと心の中に思ひしも、段々と談論の運ぶに從ひ、アゝ此れは予の先生なり、最初の無禮は予を試めす爲めの一喝のみと悟て、何んとなく己れの祖父の如き心地致しぬ。而かも伊藤公に向ふては、維新前後の經歷談を聞かんと欲する心を起せしまでにて、一向欽慕憧憬の念を起すこと能はざりき。其れ然り然れども伊藤公や兎も角も一代の偉物なり。其善人なるが故に情致の濃かなるものありき。虚榮心を脱する能はざりしも、一たび日本政紀に感奮して起り來るや、終始皇室の爲めに赤誠を盡せり。豪膽鐵の如しと謂はるゝ人にあらず、寧ろ才子肌の弱蟲なりしと雖ども、而かも來原の屍を收め、松陰の首を洗ひ、大津にて暗殺

の刀を反らし、横濱の夷館に於て割腹の覺悟を爲したる如きは、矢張り維新の諸豪傑に伍して愧ぢずと謂ふべし。伊藤公の特長は達觀的聰明の頭腦を以て善く日本を指導したるに在り、而して其缺點は濫行を以て世の風俗を亂だせしにあり。吾人文明黨に屬するところより云はゞ、頭を低れて伊藤公に感謝せざるを得ず、然れども社會教育に從事する所より云はゞ、冠を彈じて伊藤公の終焉を喜ばざるを得ず。若夫れ其横死に至りては所謂る仁を求めて仁を得たるもの、而て予は寧ろ羨望に堪へざらんとす。夫れ死は一なり、横死病死吾人其の何れを選ぶべき、若し横死して壯烈の氣概を國民の間に鼓舞することを得ば、病死して聞ゆるなきに孰與ぞや、謹で公が有終の美を成したるを祝す。

青年諸君に檄す

諸君は今日の日本を如何に觀る。小生の觀るところにては、滅亡より外はない。滔々たる世人多くは皆個人的に陷つて仕舞つた。勿論之れには理由がある、今時他人の事や天下や國家やを考へて居ると、自己が干物になつて仕舞ふ。背に腹は換へられぬと曰ふ。無理はない。併し結局此儘で行けば、どうなるであらうか、土崩瓦解よりも仕方があるまい。陳腐の言だが、『上下交々利を征て國危し』とでも謂

はふか、支那朝鮮の樣になるとでも謂はふか、世の腐敗を歎ずるものゝ口吻を借りて、羅馬の末路を云々すべきか、兎も角もヒドイ事になつて仕舞つた。

併し悲觀して居たばかりで仕方がないから、こゝに狂瀾を既倒に回すの大計畫を爲ねばならぬ。先づ日本の今日ある原因より稽へて見たい。國亂れて英雄起るとある通り、內憂外患の爲めに奮激せしめられたからでもあらうが、彼れ維新の志士が、續々其身を挺して國家の爲めに盡瘁したることに就ては、原因がある、即ち多年武士道なるものに養成せられて居たからである。印度や朝鮮や支那の今日あるのは、彼の國に武士道なるものが養成せられて居なかつたからである。羅馬帝國の盛んなる時は武士道の盛んなる時であつた、而して其亡びたのは、武士道の亡びた時であつた。數日前板垣伯に會つた、而して舊時のお話を聽いた、其中に曰く『大和筑波の旗擧も

皆々失敗に終つたから、いよ〳〵京都に出て西郷と約束し、西郷は鹿兒島より予は土佐より兵を引て東上すべしと決するや、中岡愼太郎（阪本龍馬と倶に暗殺せられたる人）が之を聞て感激し、然らば予は西郷の處に人質となり居り、板垣が約に背きたるときは割腹すべしと誓つた』云々、世が世なるが故とは云へ、維新青年の意氣と抱負や壯んなりと謂はねばならぬ。又た西郷が國家の爲めに其身を殉すべしと決心せしもの丶、眞逆の時に未練があつてはならぬと考へ、其れより禪僧に就て死生脫却の工夫を積みたるところなどは所謂る壯烈鬼神を泣かしむる概がある。併し之れは維新の志士が偉いばかりでなく、板垣でも西郷でも、皆其武士道の敎訓を受けた親、又は先生があつたからである。今や日本は日露戰役の爲めに、世界各國より非常なる名譽を負ふて居る。其武勇に於ても其人道的動作に於ても、實に世界を驚嘆せしめた。併し是れ亦た偶然の事にあらず、上に立つて日露戰役を指揮

したる人物が皆舊時の教育を受けた武士魂の人であつたからである。

さて右樣にして武士道の感化と其勢力とは偉大なるものであつたが、斯道これからは如何なるであらうか、小生の觀るところでは、最早や武士道もお仕舞である。封建時代の崩壞と共に、社會の構造が變つて來た、君臣の意義も變つて來た家族の狀態も變つて來た、學問の種類も變つて來た、今時舊時の武士道を鼓吹する者は、恰當淺草の奥で興行する劍術の先生か、時々弓矢の大會に出張して來る丁髷先生と同一視せらるゝ樣になるであらう。殘念なることではあるが仕方がない。然らば今後如何にして此の武士道を繼續せしむべきか、是れ實に大問題である。

更に政治界を見るべし、驥騏も老ゆれば駑馬に及ばず、維新元老の舞臺も最早やお仕舞である、伊藤公の華々敷最後で、元老の幕は

終局を告げた。左らば今後はどうなるであらうか。諸君は調度日本の三代目を引繼ぐ身の上となつて居る。一國でも一家でも豪物が出た後の二代目は、少く馬鹿でも間拔でも勤まるが、三代目が大切なのである。

今の當局者、諸官僚、議員の方々は、皆二代目を勤めて居らるゝのである。硜々たり汝々たる方々でも、先づ先代の餘勢でやつて行けるが、併し三代目となると、色々の議論と紛擾と野心家と謀反人の爲めに、攪き紊さるゝ時が來たるであらう、其時に當ては一代の名望を負ふ者か、至誠人を服せしむる偉人か、外は宇内に對し内は民庶に對して畏敬せらるゝ人物かゞ出るに非ずんば、我國は忽ち大危險に遭遇するに極つて居る。然るに今日の日本社會は、斯る大人物を養成すべき資格を持て居らぬ。前申す通り、維新の豪傑は、皆當時の社會より薫陶せられて來たのである、即ち由て來るところが

あるのである。然るに今の社會は才物や小物や俗物を製造するに適して居るが、高且つ大なる人物を養成するに適して居らぬ。佛像は安置せられて居るが、其中は蟲に蝕はれて朽ちて居る、會堂は處々に屹立するに至つたが、大抵は外國よりの乞丐して來たもので出來て居る、とても獨立濶歩の人間を造ることは六ヶ敷。教育は記誦に落ち、學者は職工となる。而して武士道は淺草の奥に葬られんとして居るのである。心細きこと限りなしと謂はねばならぬ。

然則此の悲觀を轉じて樂觀たらしめんとするには如何になすべき、曰く先づ武士道の繼續より論せねばならぬ、吾人はこゝに日本教會(今の道會)なるものを起した、而て其主張は數年以前より發表する如く、四大綱領を骨子となすものにして、從來の如き狹隘なる見地の宗教にあらず、かの祖師的宗教を排し、宇宙一、神一、人類一、大道一也と說き、宗教に於ては奉神を說き、道德に於ては修養を說き、社

會に向ては愛隣を說き、永遠に對しては靈魂不滅を說き、主とするところは言說よりも實行に在りと斷ずるのである、而していづれの宗教を問はず、國風に應じて其狀態を變ずべきものなるを以て、我道會にては、儒佛をも說き、老莊をも說き、我信條に矛盾せざる限りは、勉めて我が舊來の良俗美風を損せざらんことに留意し、所謂る武士道の鼓吹に於ても、其精神を取て、其形體を取らず、之をして二十世紀の武士道、即ち宇內的武士道たらしめんと期するものである。ソコで靑年諸君、先づ萬國興亡の跡を閲みし、而して我國の今日ある所以を察し、更に目下の我國狀を熟視し靜かに吾人の主張を聽て貰いたいのである。然而して若夫れ吾人と其主張を同すとせば、今より宗教道德に志し、啻に一身の向上を謀るのみならず、我國の狂瀾を旣倒に回すの大計を畫してもらいたいのである。吾人微力にして此の大業を成し遂げ得るや否やを知らざれども、今日の宗教、

今日の教育、今日の政治、今日の社會を此の儘に放擲し去らんには國家の崩壞は鏡にかけて見るが如きであるから、幾るゝまでも之れが爲めに奮鬪するつもりである。啻に宗教道德の上のみならず、政治の上にも大に注意を惹くべき希望なるのである小生は曩に青年政黨論を作りて鄙見を述べて置いたが、實に國家の大機關は政治である、此政治にして改まらば、教育も、實業も、美術も、否、宗教まで其面目を改むるに極つて居る。左らば諸君は今より十分の修養を積み、此二代目政治家に代るべき準備を爲さねばならぬ。朝に在りては總理大臣より諸官僚に至るまで、野に在ては衆議院議員より各民間有志の事業に至るまで、遂には青年諸君の掌中に歸するものに相違なければ、其時に當りて硜々汲々の動作を繰り返すことなく、どうしても此三代目を立派に繼で貰はねばならぬ。今日小生の觀るところにては、諸君に大抱負と大元氣とが缺けて居る樣に思はれる、

而して小生が天下の事を論じ、宇宇内の事を舒べ、英雄偉人を語ると、何んだか大言壯語でもする樣に、又た無暗に青年を煽動する樣に思はるゝ方が多い樣である。又たソンナ談柄は時勢晩れである、其れよりは早く錢儲の出來る方法か、競爭場裡の苦悶を救ふて下さる道はないかと尋ぬる人の尠くない樣に見受けらるゝが、實に情ない談でないか。勿論小生は敢て英雄豪傑を諸君に望むのでない、又た望んだところで駄目なるを知る、併し今や宇内に押出して、覇を太平洋上に爭はんとする大日本帝國の青年にして、盡く皆町人根性の錢儲を念じ、煩悶を訴へ、而して此千載一遇の時に際して、驚天動地の大業を畫する能はず、空しく小生を呼んで時勢晩れの大言壯語家と爲す如きは、抑も何んたる意氣なき又た何んたる抱負の無きことぞや。若しも自己英雄豪傑たる能はずんば、責めては英雄豪傑の下に附く一兵卒とでもなりたい氣を起すことが出來ないか、時勢の

罪とは云へ、實に情けない人々である。

是故に小生は此際青年諸君に檄して、是非とも宗教道德に志して先づ其人格を養ひ、次ぎに教治に志して此の世を匡して貫ひたいと望むのである。而して宗教道德に於ては、已に日本教會ありて之れに任じ、政治に於ては今や青年團體を起さんとして居るのであるが、其は兎も角も青年諸君、何所までも注意を願ひたいのは、我日本の前途である。日本も此儘に放棄し置かば、其の結局は必ず亡國に極つて居る、是故に此際是非とも青年諸君の奮起を望まねばならぬのである、大覺醒を望まねばならぬのである。青年にして國家を忘るるに至らば、青年にして元氣を消失するに至らば、いよ〳〵前途は悲觀のみである。千古の英雄ソビエスキーが、涙を揮つて議會に警告し、其の國の滅亡を豫言したる波蘭の歴史を讀む毎に、小生は同情の感に堪へぬのである。波蘭と日本とを比較すれば、諸君は不倫

なりと怒るでもあらうが左樣でない。一たび舵を失して流れ行く小舟の滅亡を豫言することは、其れが巖石の前に抵るのを待たずとも出來得べきことである。世の壓迫に遇ふて小氣俗魂の人と化し去る青年の中に在りても、尙ほ少しは道を聽て動き、國家を憂へて起つ青年なきにあらずと信じ敢て青年諸君に檄するのである。

支那と日本

近時支那の貴賓續々我國に來りて、大に學ぶ所あらんとす。支那

通は謂ふ、支那は到底度し難しと。然れども吾人は尙ほ支那に望を屬するを以て、支那がしば〳〵馬鹿の擧動を爲すを聞く毎に、最負の目よりおれつたさに堪へざるものあるなり。夫れ支那の急務は第一、飽くまで同文同人種國たる日本を信じ、之れと相結ぶに在り。第二、暫く海外の侮辱を忍び、日本の如く『己れ今に見よ』との意氣を以て、速かに文明の制度と利器とを入るゝに在り。空憤と戰國策的外交は、益々支那を滅亡に導くものたるのみ。貴賓等は、能く之を看取したりしや否や。

心得べき三教

佐藤一齋の言志錄に曰く。教に三等あり。一曰く心教。二曰く躬教。三曰く言教と。今時、演說を聽き、說教を聽き、講義を聽くもの、皆其の人の言教に接せんと欲するものなり。而かも記憶せよ、言教は末なり。宜しく躬教に着眼せざるべからず。老子の士成綺に教へたる、山田方谷の河合縫之助に教へたる、皆此の躬教なりき。吾人の大人物に接して學ばんと欲するものは、言教に非ずして躬教なり。

其言如何に高且つ大なるも、躬行之れに伴はざるものは、吾人の師表となすに足らずと知るべし。其れ然り然れども、躬敎仍ほ末なり、須らく心敎の奥に達せざるべからず。躬敎は往々人を誤らしむ、磊々落々の人物に接すれば、直ちに豪傑を學ばんと欲し、温良純穆の人格に接すれば、直ちに君子を學ばんと欲す。而して其天禀の性質如何を顧ず、杉容を曲げて松形に擬し、松形を矯めて杉容に擬せんと欲す、於此乎醜態殆んど見るに堪へざらんとす。孔子曰く吾れ言なからんと欲すと。是れ心敎を以て倘しと爲す所以なり。心敎とは何ぞや、其心魂のある所を學ぶを謂ふなり。大人物の資格は言説にあらず、言は鸚鵡も猶ほ學び得べし。又容態にもあらず、容態は猿猴も猶ほ眞似得べし。大人物の資格は心魂にあり、即ち學ぶべきところは心敎にあり。心敎を學ぶものにして始めて修養を語るべきなり。彼れルーズベルトを見よ、其心魂は奮鬪に在り、任俠に在り、

人道的權化者たるに在り、拔俗出塵の高風を喜び、貴賤一視の神觀に入り、己が實力のあらん限りを盡して以て、人の僕となるに在り（馬太二十の廿七、八）。吾人の學ぶべきは此に存す。誰か今日の世に、能く大人物の心魂を學び得るものぞ。佛や花を枯して口言はず、此の消息を學び得るものにして、始めて遺鉢を傳ふべきなり。

國民教育の主眼

國民教育の主眼たるもの、大凡そ八あり。一曰く、金甌無缺の國體。二曰く立憲政體、三曰く國家、四曰く世界、五曰く宗教、六曰く國家興亡の原理、七曰く人格、八曰く教員是れ也。請ふ試に之を說ん哉。

先づ世界に向ふて、我國民の誇るべきものは、建國以來、殆んど三千年の久きに亘るも、內は皇統連綿として、未曾て絕ゆるなく、

外は一拳土たりとも、外夷の爲めに侵かされざりし事、即ち是れなり。凡そ古今に亘り。萬國を通じて觀ずるも、此くの如き國體は、未曾て一箇だも之れあらず。何等の神秘ぞ、何等の不可思議ぞ、殆んど神護奇蹟とも稱すべきものあつて存するなり。左らば吾人はどこまでも、此の國體、即ち萬國無比の此の國體、金甌無缺の此國體を愛護し、之を童兒に說き、之を國民に訓へて、永へに我國體の宇內に冠たる所以を知らしめざるべからず。

第二は廣く我國民をして、立憲政體の難有ゆえんを知らしめざるべからず。陛下は至仁至愛なり、於此乎、吾人國民の休戚を案じ、自ら謙し、自ら制し、更に其子孫に誓はせて、こゝに憲政を布かせ給へり。左らば吾人臣民たるものは、上は廟堂の總理大臣より。下は寒村の選擧民に至るまで、相與に陛下の御仁德に副ひ奉り以て憲政の實を擧げざるべからず。然るに今日に於ては、尙ほ此憲政の

何物たるかを知らざるもの多く、爲めに依然たる素町人土百姓の徒を都鄙に充たしめ、我が上下に非立憲の行動を見るも、之を責むるものなからんとす。吾人敎育に從事するものは、深くこゝに心を致し、小學兒童の時代より、懇ろに憲政國民の如何なるものたるかを知らしめ、以て陛下の大御心に報ひ奉らざるべからず。

第三は國家心の養成を謀るに在り。今や競爭劇甚の結果として、人々皆一身の生計をのみ是れ案じ、絕へて國家に及ばざらんとす。飜つて歐米を見るべし、其公德の養成と、國家心の鼓舞とに努むるや驚くべきものあり、こゝを以て手以て公園の花を折るものなく、足以てプラットフォームの先を爭ふものなく、靜々肅々、恰も君子國の人かと異しまる。之を以て我國に比す、赧然言ふところを知ざらんとす。更に愛國心の有無を問はん乎。旅順の海、奉天の山、見、死、如、歸の大活劇は、實に世界を驚嘆せしめたり、而かも戰歇んで平

日に復へれば、兄弟外に爭ひ、同胞內に欺き、政界腐り、財界荒れ、富者は淫し、貧者は濫し、國家將に亡徵を現示し來るも、未だ身を殺して、之れが爲めに盡さんと欲するものを見ず、然則前に身を挺して戰ひしものは、愛國心に非ずして、喧嘩心たりしなり。若夫れ眞に愛國心を有すと云はば、我國今日の亡徵は、三十七八年役よりも、更に愛國心を發揮すべき時と知らずや。然則君等敎育に從事するものは、此際兒童に敎へ、父兄に說き、凡そ愛國心なるものは、一旦緩急の時にのみ發揮すべきものにあらず、平素國家の爲めを念じ、國家の爲めに憂へ、國家の爲めに、其身を挺して盡すべきものたるを知らしめざるべからず。

第四は世界各國の形勢を知らしむるに在り。金甌無缺の國體は、實以て宇內に誇るに足る。然れども之をして長へに斯くあらしめ得るや否やは、吾人の覺悟如何に存す。彼の神風にのみ一任し去つて

晏如たる如きは、舊時の夢のみ。星眼鋭く我れを射、鷲翼未だ翼を歛めざるなり。然則此際大聲疾呼我が國民を警醒し、曾てピスマルクが學童に注ぎたる心を今日に注ぎ、曾てウエルリントンがイートンに顧みたる往時を今日に顧み、何時狂瀾怒濤が外國より押し寄せ來るとも、之に對する決心覺悟のあるべきところを告げ置かざるべからず。

第五は國家興亡の原理を敎ゆるに在り。國の亡ぶるや、亡ぶべきときに亡ぶにあらず、必ず由て來るところありとは、古來よりの金言なり。三河武士の幕末に振はずして、薩長の維新に興れる、普國の覇を稱して、墺國の衰へたるも、皆由て來るところのものあるなり。予曾て國家興亡の原理に就て八箇條を擧げて曰く、第一は武力の强弱、第二は文事の隆替、第三は治者と被治者との關係、第四は宗敎の種類、第五は國土の大小、第六は實業の盛衰、第七は婦人の

地位、第八は日進と固滯の國勢、大凡そ此八箇條の如何を知らば、以て其國の運命を卜すべきなりと。知らず我國今日の情勢、果して如何。夫れ諸君は地方に於ける國民の指導者なり、未來の國民たる兒童の訓育者なり、須らく右の條々に基き、證を引き、例を擧げて以て、國民の奮起を促さゞるべからず。

第六は宗敎に就て心得べきものあり、凡そ兒童の敎育に從事するものは、或る特種の學校を除くの外は、勉めて普及的眞理の上に德育の根底を置かざるべからず。或は佛を稱して耶蘇を貶するも不可なり。或は耶蘇を稱して佛を貶するも亦た不可なり。神を拜するも佛を拜するも、敎育者の眼中には、異同あるなし、偶像を拜するものも可なり、天理敎に屬するものも亦た不可あらず、要は只だ諸敎に具備するところの倫理的方面を稱揚し、兼ねて兒童の衷に發生し來るところの宗敎を毀傷せず、却て之れが倫理と相待て、兒童訓育

上の一大要素たることを忘れざるに在り。

第七は人格を重んぜしむること即ち是れなり、試みに今日の兒童に問へ、何人を賤と爲し、何人を貴と爲すやと、恐らくは答へん、上等の船車に駕するものを貴と爲し、下等の船車に坐するものを賤と爲すと、然り、是れ一面の眞理なり、然れども人は船車の上下を以て、其貴賤を分つべきにあらず、若夫此くの如くんば、徒博の親方は、小學校の先生よりも貴く、耶蘇も孔子も、終に三井の番頭に及ばざらんとす、而かも是れ今日の兒童に映ずるところの社會觀なり。左らば說け、說て人間の尊きゆえんのものは其人格に在ることを知らしめよ、即ち金にあらず、位にあらず、其精神に在ることを知らしめよ、其神魂に在ることを知らしめよ。

然而して第八は即ち敎員の人格如何に在り。人或は問はん。汝の謂ふところは、皆盡く堂々たる大問題なり、之を小學の兒童に說か

んとす、迂も亦た太甚しからずやと。予の曰く然らず、敎員の人格如何によりては、彼れ兒童をして、涙を揮ふて聽かしむべきものあつて存せん、試みに吾人の一生に顧み來れ、吾人は種々の境遇を經過し來りたるも、遂に兒童時代に受けたる感化を脫する能はざりし事實を發見せん。左らば赤誠を據べて兒童に向ひ、先づ我國體の如何を說て、自重心を起さしめ、次に憲政の精神を說て、自奮力を出さしめ、更に今日の現狀を說て愛國心を鼓舞振作し、遂に世界の大勢より、國家興亡の原理に及び、更に天と人とに關する道念より、施て人魂の價値に及び、切々偲々として懇示せよ。將來の日本國民は、遂に諸君の至誠に由りて改造せられん。夫れ國家百年の長計は唯り兒童を薰冶する上に在るのみ。ウエルリントンとビスマルクは、終に吾人を欺かざるなり。諸君以て奈何と爲す。

國民的大理想

凡そ宇内に發展すべき國民は、必ず偉大なる理想を抱て居る、英國民の理想は、アングロサクソン文明を天下萬民の上に及ぼすのである。彼れは印度を領し、濠洲を取り、亞非利加を掠めて、專ら侵略主義を事とするが如きも、其心中には、我れは萬民の恩人である。天下の救主であると確信して居る、彼れは印度に於て隨分不埒な政策を放にす、併し英國が鐵腕を振て、印度を支配し居らずば、

印度には内亂の絶ゆる間なく、人民の塗炭に苦しむべきは火を視るより明かである、而して英國が印度を支配してより以後、印度人の文明と幸福とに貢献したことは偉大なものであると確信して居る。濠洲に對するも亦た然りで　彼れは喰人種を教化して、文明人となした、惡魔の配下より救い出して、眞の神の子供とならしめた、英國が濠洲を領するのは、其土人の身と魂とを救ふ爲めであると確信して居る。勿論かゝる國民的大理想は、一朝にて起りたるものではない、英國人は先祖代々より、此大理想を抱て宇内に發展する樣に教へ込まれて居るのである。露國にも一大理想がある、彼の彼得大帝が起りし以來、露國の理想は、世界を統一せんと欲するので在る。秦皇の大志を抱て居るのである。勿論かゝる大志は一代を期して成遂げ得らるゝものでないから、數代若くは百代を期してやるつもりで、着々其歩を進め來り、終に我日本と衝突するまでに至つたので

ある。彼れは皇帝に政權と教權とを握らしめ、正教を以て萬民を風化し、神政を以て天下を統率せしめんとする大理想を抱て居るのである。他國より見れば徒らに侵畧主義の蠻行に出づるものゝ如く思はるゝも、彼れ自己にとりては、内自ら省みて疚しからざる主張を以て居るのである。其他米國を云はんか、佛國を云はんか、近時俄かに頭角を擡げ來れる獨國を云はんか、皆孰れも其れ〳〵手前勝手ながら、一大理想を抱て天下に臨まんとして居るのである。併し今は其説明を略して、さて問はんと欲するものは、我日本國民の理想如何である、日本國民は何を大理想として天下に臨まんと欲して居るか、英國の如く我が文明を天下に施かんと欲して居るのか、露國の如く、神政と正教とを以て天下を統一せんと欲するのであるか、予輩の問はんと欲するものは、此種の一大理想である。先づ日本は朝鮮を其保護の下に置いた、然則何教を以て彼れを風化せんと欲

するか、如何なる文明を彼の國に入れんと欲するか、宗教は米國宣教師に一任し去り、荐りに排日思想を鼓吹せらるゝも顧みず、在韓の日本人は無禮に振舞ひ、在韓の官吏は行狀を慎まず、朝鮮人の意向は、日に〳〵我れを離れて背走するも、我れに教化統率の理想物あるなし。孟子の所謂る『東面して征すれば西夷怨み、南面して征すれば、北狄怨む』とまで行かずとも、彼れ久しく無政府の下に苦しみ居たる韓國の民をして、簞食壺漿して我れを迎へしむるとは敢て難きにあらざるなり。然るに畢に今日の如き紛々擾々を釀し來り、外國をして其釁に乘ぜしめんとするは、返す〳〵も遺憾である。之を要するに、我日本國民には、海外發展上に於ける一大理想がないからである、又之を教へ込まないからである。米國に行くも、支那に行くも、滿洲に行くも、朝鮮に行くも、孔子の所謂る『欲速見小利』の徒輩のみ多く、終に大事を誤るもの比々皆以て然らんとす、實に

忌まゝしき次第と謂はねばならぬ。

然則如何せばよろしきやと言ふに、先づ宗教上より觀んに、日本の政治家は法律あるを知て、宗教あるを知らず、賞罰を知て、風化を知らず、こゝを以て已に政治家たる資格の一半を失ふが故に、天下の經綸を語るに足らずと雖も、若し夫れ當局者たらしめんか、予は先づ佛教派と云はず、基督教派と云はず、若くは新教と云はず、凡そ今日の我國に存在する若くは起り來れる宗教を奬勵し、大和民族の發展と共に、之を宇内に弘めんと欲するの覺悟に出でざるべからず、猶ほ歐米の諸國家が、競ふて其國の宗教を萬國民の間に傳ふる如くなさゞるべからず。又た政治上より謂はしむれば、今や我國は百事を歐米に法る最中なるを以て、我文明を歐米に入れよと云ふまでには至らずと雖ども、彼れ支那、朝鮮、南洋、若くは印度の如き東洋に於ては、其人種、其風俗、其宗教、其思想の關係より、我

文明を採用するを最上とす。日本は歐米より善き物を得たり、然れども亦た之れと同時に惡き物をも得たり、然るに支那朝鮮印度等は、我れの得たる善き物を撰びて、我れの得たる惡き物を棄つるの特權を有す、是故に吾人は我文明を率ひて、大に彼國民を誘導し、啓發し、薫化し、彼國民の兄ともなり、恩人ともなる地位に立たねばならぬ。是れ我が大和民族が東洋に對する一大理想たらねばならぬものである。然るに今や日本人は朝鮮に行くも、支那に行くも、滿洲に行くも、政教の二道に於ける斯の二個の大理想を抱くなく、天の祝福が我れを通じて、彼の國民の上に降るべきものたりとの高崇偉大なる信念を抱くなく、徒らにポンペイ歴山王等の征服の跡に倣ひ、只だ利是れ求め、只だ權是れ張らんとす。英露の國民に對して愧づべしである、否、日本の前途は駄目である。

併しながら之れと云ふも、我國の政治家、我國の教育家、我國の

宗教家、我國の論者等が、此大理想を自覺するなく、政治家の眼光は議會操縦の外に出でず、教育家の志願は碌々たる役人にて滿足し、宗教家の頭腦は一教會の説教にのみ全力を注ぎ盡し、操觚者の耳目は空しく世の出來事を趁ふて走るのみ、而して國家百年の大計の如き宇内發展の大理想の如きは之を夢裡にだも見る能はず、彼等は今日の不景氣を見、人心の萎靡して振はざるを眺め、是れ一時の現象なり、今に回復の途に向ふべしと慰言す、然れど若しも日本人にして海外に發展すべき希望なしとせば、畢に國内に蟄居して氣死するより外仕方なきなり、否、如何に海外に發展せんと欲するも、道德的觀念なきもの祝福的理想なきものは、到底發展すべき運命を有せぬのである、是れ古今の歴史の證するところで、今更事新しく論ずるまでもないことである。因て予輩は此際大に我國民を警勵し、政教の二道を以て我東洋を啓發し、東洋の祝福は、我日本人を通じて

降るべきものたるの確信を抱かしめ、從て其確信に伴ふべき行動を取らんことを勸告するものである、若夫れ此確信を我國民の全體に抱かしむるを得んか、我日本の發展は破竹の如く、我國人の活動は噴火の勢に比すべきものあらん。思ふに我國民今後の死活は、此大理想を抱くや否やに由て決せらるべく、日本經綸家の大小は、此大理想を自覺するや、否やに由つて定まるべし。知らず猶ほ此言を以て空言と爲すか。

個人的理想

衣食に奔走し、奔走に衣食して、是れ日も足らざる動物的下級の人民は暫く論ぜず、苟も中流以上に位して、世に紳士とも貴顯とも呼ばるゝ諸君に向ふて問はんと欲する一義あり、即ち諸君が世に生存する理想如何と云ふことである。名は人の欲するところである、君子は世を終ゆるまで名の稱せられざるを惡むとかや、併し能く能く周圍を見給へ、評判のよろしい人に惡物あり、無名の人に君子あ

り、友人に關する世評を聞くも、十に八九は間違つて居る、褒むるとても、我を知て褒むるにあらず、誹るとて我れを知て誹るにあらず、考へて見れば馬鹿々々しくなる。利は人の好むところである、地獄の沙汰も金次第とかや、併し利を見て集るものに碌なものあらず、表面には令色し、裏面に吐舌す、我れを崇拜するにはあらず、我が財産に向ふて崇拜するなり、人心の反覆をかこつは野暮なり、天下擾々利の爲めに去來すとは、太史公を待て始めて知るべきことあらず。左れば何んの爲めに汲々たり。又た兀々たる。或人予に告げて曰く、我れ嘗て成金黨に就て研究するところありしが、大抵は一定の道程を辿るものゝ如し、其初めて一攫千金の幸運に遇ふや、先づ買ふところのものは藝者なり、次に購ふところのものはダイヤモンドの指輪なり、而して次には家屋を新築し、次には妾を置き、次には別莊を造り、次には書畫骨董刀劍の類を集め、而して最後に

は子孫の愛の爲めに其の財産を傾け盡して惜まざるに至る、成金黨の理想は到底衣食住と其の一身とを離るゝこと能はざるなり、亦た卑にして陋ならずやと。其れ然り然れども吾人想ふに是れ啻に成金黨のみにはあらず、滔々たる我國の求利家諸君、果してこれ以上の理想やある。彼等が財産を得て爲さんと欲することは何事ぞ、曰く飲むことなり、食ふことなり、飾ることなり、花柳に遊ぶことなり、愛妾を蓄ふことなり、家屋を新築することなり、美術品を集むることなり、而して最後には己のが子孫の爲めに美田を購ふことなり、之れ以上に果して何の理想やある。尤も中には金を儲くる事其事が己に大快樂なりとて喜ぶ者あり、十萬圓溜れば、五十萬圓溜れば、百萬圓して力み、五十萬圓溜れば、百萬圓の人に比して殘念がり、千萬圓溜れば、更に海外の富豪と競爭して口惜がり、遂に金錢の何物たるを解せざる愚物と成り了す。之を要するに我國財産家の多數には、

未だ人らしき理想を抱くものなきものゝ如し。

然則個人的理想と稱すべきは何んであるか。曰く人各々其の天職を盡すべきこと即ち是れである。名は人の好むところ、利も亦た人の望むところ、故に之を嫌厭するに及ばず、評判も取るべし。甘き物も食ふべし、大厦にも坐すべし、自動車にも乘るべし、然れども人には一個の情慾を恣にして喜ぶの外、更に神と人とに對して、一大責任のあることを忘れてはならぬ。彼れ蠢々たる下級の人民には之を說くも詮なしと雖ども、苟も紳士貴顯として世に立たんものは、啻に一個人の遊樂と私情にのみ其一生を過すべきにあらず、若夫れ世に學者として立たんにはスピノザの如く、其一生の大理想を眞理探求の上に置かざるべからず、若夫れ世に政治家として立たんにはビスマークの如く將たグラッドストンの如く、其一生の理想を國家の富强、若くは文明の發展に置かざるべからず。若夫れ世に宗

教家として立たんには、保羅の如くウエスレーの如く、其一生の大理想を滅亡せる人魂の救拯と腐敗せる社會の廓清とに置かざるべからず。然而して若夫れ世に富豪家として立たんには、カルネキーの如く、ケネデーの如く、其一生の大理想を國家と人類との上に置き、我實業に盡瘁するは、我國家の富源を啓かんが爲めなり、我が營利に汲々たるは、宗教、教育、慈善其他の公事を助けて以て、我國の文明と同胞と幸福に資せんが爲めなりとの高崇偉大なる觀念、即ち立派なる個人的理想の人たらざるべからず。

嗟吁我國の學者たり、政治家たり、宗教家たり、富豪家たるもの果してかゝる大理想を懷くや否や、吾人は我國民が國家的理想に乏しきが爲め、海外發展の上に活力を失し、個人的理想に乏しきが爲め、我國の公共事業を萎靡せしむる實跡を目覩し、之を歐米に比し甚大の遺憾なき能はず、乃ち本年の劈頭に當り、先づ我國民に向ふ

て、此二大理想の自覺と活動とを促さんと欲するものなり。

―宗　教―

他教と基督教

老　莊

道は一なり、只だ其の見るところによりて異なるのみ、莊子の所謂る『彼れは此れたり、此れは彼れたり』とあるは、實に達見と謂はねばならぬ。今試みに他教と基督教とを比較して、其差別の中に一致を見、一致の中に差別を見て、大に學ぶところあらんと思ふ。

老子曰く、道の道とすべきは常道にあらず、名の名とすべきは、常名にあらずと、天下の宗教家を罵倒して痛快と謂ふべきである。然而して莊子も亦た其意を繼で、こゝに養眞、應變、自得の三教を說いた。養眞とは只だ眞是れ求むとの意なり、或人あり、老子を惡評するものゝ言を聽て、左樣かソンナ僞物であるか、然らば一ッ行て其面皮を剝てくれんと意氣込み、乃ち行て、『先生あなたは世間で評判する如く偉い人でなく、隨分ヒドイ殘酷な事を爲さるお方である相ですな』とやると。老子はイヤ其通り仲々偉いどころでなく、我れながら愛想のつきる人物で御座る』と答へ、其後其者が悔悟して、謝辭を陳ぶると、洪笑一番しつゝ、『乃公は馬と云はゞ馬、牛と言はば牛、一向人の言ふことに頓着せぬ、只だ夫れ眞を養ふに在り』と敎へたと云ふ。此心得が即ち老莊の極意である。之を基督敎で云ふならば、世の譏譽褒貶に關せず、只だ『神知り給ふ』との一念を以て滿足する

ところが其れである。次には應變なり。應變とは如何なる場合に臨むも窮せざる極意なり。彼の『智にして能く愚、鋭にして能く鈍、巧にして能く拙、強にして、能く弱』と云へる如きは、此消息を洩すなり、壺子と列子との問答の如き、鬪鷄の篇の如きは、皆此極意の說明である、之を基督敎で云ふならば、保羅の所謂る富に居るの道を知り、又た貧しきに居るの道を知る』と云ふところなり。次には自得なり。彼の齊物篇に鯤鵬が蜩鷃を執へて、『此二蟲又何をか知らんや』と輕侮すれば、蜩鷃は又た其役々たる樣を嘲笑して、『彼れ且に奚に適かんとするや』と謂ふところ、實に自得の極致である。然而して之を基督敎で云ふならば、汝等思ひ煩ふなく、只だ事毎に感謝せよとあるところと同じ事なり。之を詳細に吟味し來れば、此れは彼れなり彼は此れなり。極意はいづれも同じ事である。

佛敎は此くの如きものであると云へばイヤ〳〵ソンナものにあらずとて、色々のお經を並ぶべきも、先づ吾人の視るところにては、之を消極と積極とに分つべし、而して其消極より云ふならば、一休の歌に

掘らぬ井に溜らぬ水の波立て
影も形もなき人ぞ汲む

と云ふのがある、是れは寔にヨブの悟道と相類す。ヨブは富豪より貧者に落ち、種々樣々の悲境に遭遇したが、曾て一回だも神を詛はず、『我れは赤裸にて生れ來れり、又赤裸にて去らんのみ、神與へ給ひ、又た取り給ふアーメン』と云へり。又た其積極より云ふときは、白隱禪師が、濡衣を着せられながら、甘んじて之を受け、一向其等

に頓着せざるところの如きもの、即ち是なり。之を基督教にて云ふときには、世の汝々を脱却して、神と合體する奥義と同じことである。斯く云ば佛者或は謂はん、佛教は左様に容易に説明し得らるべき者にあらず、イヤ何々、イヤ何々と、數多の術語を以て辯ずべきも、ソンナ連中は、畢竟大悟達觀の域に入る能はずと知るべし。

儒

先づ道德と宗教との二ッに別ちて説くべし。儒教の主眼は、躬行實踐に在り。子夏曰く、『賢を賢として色に易へ、父母に事へて能く其力を竭し、君に事へて能く其身を致し、朋友と交はりて言て信あらば、未だ學ばずと曰ふと雖ども、吾れは必ず之を學びたりと謂はん』とあるは、即ち其れなり。イヤ私は學問致しませぬ。書物を讀んだことは御座りませぬと云ふ無學な人でも、若し行爲にして、道に

協ふて居るならば、之を學びたるものと謂ふてよろしい。學者と謂ふてよろしい。左る代りにたとひ學者であつても、一向其道を實行せぬものは、學びたるものにあらずと斷せねばならぬ、是れ儒教の骨髄である、而して之を基督教で云ふも、亦た實に同じことで、耶蘇曰く『主よ主よと曰ふもの、盡く天國に入るにあらず、唯だ之れに入る者は、我天國に在す父の旨に遵ふ者のみなり』と。オー神よと祈禱を爲たり、大聲あげて讃美歌を謠ふたり、滔々と大辯を振ふて説教したところで、天の父の旨に協はぬ行爲をして居るものは、天國に入る能はずとの事なり。又曰く『我兄弟とは誰れぞ、凡そ天に在す父の旨を行ふものは、是れ我兄弟なり姉妹なり』と。基督教信者は互に呼んで兄弟と曰ふ。然し洗禮を受けて教會に這入て居るものが、皆兄弟と曰ふ意味でない。佛教の人でも、儒教の人でも、神の旨に協ふ行爲あるものは、皆兄弟と稱してよいのである。次に儒教には

宗教の分子が乏しい、然し『道の本原は天に出でゝ易ふべからず』とあるところは、確かに宗教の境域に這入て居る。『鬼神の德たる其れ盛んなる矣乎、之を視れども見えず、之を聽けども聞えず、物に體して遺すべからず』とあるところは、確かに有神論者たるに相違なく、又『神を祭る神在すが如しと曰ひ、天德を予れに生ず、桓魋其れ予れを如何』とあるところなどを見れば、啻に有神論者たるのみならず、確かに其信仰を以て活動したものに相違ない。

明治基督教の失敗

輸入的基督教の終焉よりも、尙ほ慘憺たるものは、明治基督教の現狀たるべし。隆々として旭日の進歩に導かれたる我が日本帝國に在て、獨り遲々として進まざるものは、夫れ基督教の傳道なる哉。大隈伯は辭令に嫺へり、是故に其演說に於て『我日本に於ける他の文明の進歩に比して、キリスト教傳播は甚だ緩慢であつた、之れは考ふべき問題である』と圓滿に謂ひ廻されたるも、其實は大剛馬の言語

たらずんばあらず。顧みれば今より二十五六年以前予が備中高梁教會に牧師たりしとき、教會に集る聽衆は滿堂にて信者の增加せしこと年々數十人に及びしを記憶す。當時金森君は備前岡山教會の牧師たり、横井君は伊豫今治教會の牧師たりき、而して何れも年々百名以上の信者を得たりと記憶す。然るに今日は其れ如何、其盛況は昔日の半にだも及ばず。數年以前上州に遊び、而して諸教會の形勢を察するに、予等が二十有餘年以前に傳道したる如き活氣を見ず、悄乎たる其容何物かを喪ひたるものゝ如し、而して是れ獨り中國四國及び上州等に限るべくもあらず、明治十二三年より同十六七年頃までの横濱東京なる諸教會の如きも、其聽教者の數より云ふも、其入會者の數より云ふも、決して今日の如き不景氣ではあらざりき、明治基督教の失敗も亦甚太しと謂はざるべからず。勿論前陳の如く、是れ全く輸入的基督教の罪に歸す、然れども人を尤めて過すべきに

あらず、こゝに一大飛躍を爲さゞるべからざるや勿論なり、敢て問ふ目下我基督教界に從事する諸君、果して如何なる覺悟やある。

先づ吾人の問はんと欲するものは經營なり。先輩諸君諸君の中能く辯ずるものあり、能く說くものあり、而して其頭腦や宣教師の如く古からず、こゝを以て或は諸君の說教に聽衆を惑き、或は諸君の教會に入會者を增すことあらん、然ども是れ單に一教會の事のみ、日本全局の傳道を如何せんとやする。君等は日本基督教の全體を擔ふて立つべきものなり、君子は器ならず、宜しく大經營の道に向はざるべからず。然則其道如何、曰く他なし、己れを忘れて後進を容れ、爭心を擲て諸人に下り、能く周公の美を爲すに在り、而かも諸君に其覺悟あるや否や。

第二は教理なり諸君は已に基督教の何物たるかを看破す。而も從來の關係より、之を告白することに躊躇せん、是れ苦心のあるとこ

ろ、吾人は諸君に同情す。然れども最早や曖昧に附すべき時にあらず、新しき酒は新しき革袋に盛るべきなり。若夫れ彼れ原罪の如き、贖罪の如き、基督の奇蹟降誕の如き、聖書神權說の如き之を信ずるも妨げずと雖ども、之を信ぜざるも亦た可なりとの大膽明白なる態度に出で、耶蘇の說きたる敎理は、畢竟するところ信神、愛隣、修德、永生等の數條に過ぎずと說明し、要は之を實行するに在りと斷ずる勇氣を奮起する能はず、因々循々、己のが心にては、已に贖罪說を否定しながら、尙ほ基督の名によりて祈禱を捧げ、已に奇蹟降誕說を否認しながら、尙ほ耶蘇を神たらしめんと焦心し、聖書の神權說を拒絕しながら尙ほ天啓唯一の經典の如くに之を尊重するもの丶如きは、到底一大宗敎を傳播せんと欲するもの丶心膽にあらず、其輸入的基督敎と共に終焉を告ぐべきことは指を屈して待つべきなり。然而して彼れ心底より舊神學に執着し、今尙ほ之を以て新進の靑年

國を敎化すべしと爲すもの丶如きは、夜明けて燈を點ずると一般、終に一笑に附し去られんのみ。

第三は動機なり、道人を弘むるにあらず、人道を弘むるなりとは、是れ千古の格言なり。大隈伯又たその演說中に述べて曰く、『今日は口は達者になつたが、どうかすると口と行とが一致せぬ、甚しきに至りてはバイブルを汚す如き行爲を爲すことがある、願くは次の五十年間は口を以て傳道せず、行を以て傳道してもらいたい』と、蓋し據るところあつての言なるべし。宣敎師の動機は、善き報告書を作るにありき、宗派的競爭に打勝に在りき、其國の勢力を擴張するにありき、而して是れ皆基督信者の處業にあらざりき。

然則今後のクリスチアンたるものは、久しく宣敎師に中毒せられたる觀念を芟除し、先づ利己中心を離れ、天空の度量を養ひ、一局部に拘泥せずして全局に着眼し、己を忘れて後進を思ひ、百年千年

の長計を畫して、功を死後に建つるに在り。然而して若夫れこゝに勿固勿必勿我勿意の人格を養成し來りて以て、眞の基督教を傳播し行かば今後の基督教は正に猛火を以て枯草を燃くの概あらん。然れども若夫れ尙ほも達眼を茲に開くこと能はず、大覺悟を茲に定むることと能はず、只だ夫れ從來の舊套を繰り返し、イヤ同盟で御座るの、合併で御座るの、一致で御座るの、大擧傳道で御座ると騷ぎ立て、保羅の所謂る『死せずんば活きず』との斷行に出づる能はずんば、今回の五十年祝會は、正に明治基督教の葬式會なるべし、書して以て我國基督教界の責任者に質す。

輸入的基督教の終焉

開教五十年祝會と共に、こゝに輸入的基督教を葬らしめよ。顧みれば十九世紀に勃興せる歐米人の外國傳道は大失敗に終れり。布哇は第一に開かれたり、而して一時基督教感化の適例として引用せられたり、而かも今や其國は亡びて、終に其恩人の爲めに併呑せられたり、濠洲の喰人島は次で開かれたり、亞非利加の暗黑界も間もなく光明を得たりと稱せられき、而かも是亦た其宣教師國の領土とな

れり。然而して今や印度支那朝鮮の如きも、又た幾千の宣教師と幾千萬の傳道費との爲めに開かれつゝあるなり、而かも其結果はあまり有難しとも稱せられず、印度人は其言に服して其行に服せず、飴を舐らされて尻捻らるゝ心地すと呟やき、支那人は夙に白鬼の名を附して其横暴を憤り、朝鮮人は目下大持に持囃すと雖ども、見よ今に吃驚して後悔臍を嚙むとき來らん。嗟吁傳道の歴史を閲して其蹤を熟視するときには、轉た悽愴の感に打たれずんばあらざるなり。近く之を日本に視るべし。吾人が初めて基督教に入りし時代即ち明治七八年より二十年頃迄に至る宣教師は、恰も神の如く救主の如く大説教者の如く大學者の如くに尊敬せられたりき、而かも今日に於ては其れ如何、有れども無きが如く、僻田舎の教會までが、宣教師の説教ならば、先づ御免を蒙り度と申出づるにあらずや(尤も中には例外の人もあり)。吾人はフルベッキ、ヘボン、ウイリアムス、ゼンス、クラーク、ブラオン等の名を聞て尊敬の意を表せざるにあらず、更に明治初年に醫術を以て我國に貢献し、『ミッション、スクール』を開いて男女の教育に先鞭を着けたる宣教師の大功績を稱せざるにあらず、然れども傳道の方面に於ては、事實大失敗の跡あることを辯護することを能はざるを奈何にせん。

先づ其經營より謂ふべし。今回の五十年祝會に於て、デビス及び其他の或宣教師は宣言して、『爾來宣教師は日本人の指導者、命令者たるべからず、獨立自營の教會に對してデクテートすることあるべからず』と云へりとぞ、而かも既に業に晩し。彼等は日本人と印度支那朝鮮人とを同視し居たりき、而して是れ抑々大失敗の根柢なりき。本多君は青山學院の總理たりき、而かも其住家の構造は通常の教師たる宣教師の半にだも及ばず、市原金森横井浮田等の諸氏も、其同志社に從事せしときの俸給は、宣教師の半額にだも及ばざりき、宣

教師は日本人を待遇するの道を知らざりき。今は三十五六年の往時となりぬ。予一日一致教會の宣教師アレキサンダルの許に行て、傳道の意を告げ、且つ俸給を問ふ。彼れ曰く月給十二圓を與ふべしと。予曰く予に養ふべき關係者あり、十二圓にて衣食する能はず。彼れ曰く是れ規定なり、汝もし妻を娶らば更に三圓を增加して十五圓を給すべしと、予はいよ〳〵宣教師の與に事を謀るに足らざるを看破し、爾來一回だも宣教師の金を貰ふて傳道する心を起したることあらざりき。之を聞く滿州若くは支那に於ては、宣教師と土人牧師との關係は、恰も主僕の關係の如く、一は大厦高樓に嘯き、一は豚小屋同樣の陋屋に屈居すと。支那人朝鮮人はイザ知らず、苟も腰間に秋水を横へて、君辱しめらるれば臣死すと呼號し居たる武士の子弟にして、豈其の屈辱に堪ゆべけんや。嗟吁彼れ教界の名士が、其後續々として宣教師と關係を絶つに至りしゆえんの大原因は、之を宣

教師の責任に歸せざるを得ず。彼れデビス等の言をして之を廿年以前にあらしめなば、豈今日の寂寞を見んや。

第二は教理なり。十九世紀半より二十世紀に至るまでの人類は、實に驚天動地の大進歩大發展を爲せり。而して基督教も亦た爲めに革命時期に際せり。然るに彼れ宣教師は、舊來學び得たる教理の外、復た新智識を獵渉することあらず、其思想は陳腐となり、其所說は既廢の神學を脱する能はざりき。甚だ失禮なる申條に似たれども、行て宣教師のライブラリーを探査せよ、其書房には骨董的書籍のみ並列し、基督教の革命を報ずる警鐘的書類の如きは、之を見ることを罕れなりとす。其遂に勢力を失墜するに至れるや所以なしとせず。

第三は動機なり、吾人はギュリキ、マーデン若くはリーヴングストンを指して、侵略主義の人、野心的傳道者と謂ふを得ず、彼等は確かに人道の爲めに努力せしものに相違なきなり。然れども由來『ア

ングロサキソン』人種は、一種の國家的傲慢を有す、是故に到るところの人民をして、己れの國俗に同化せしめんと勉むるを例とす、而して彼れ有名なる米國の怪僧ライマン、アボットが其教壇上より、『米國は是非とも比律賓を幷呑せざるべからず、何となれば之を幷呑するは、則ち基督教の傳道を容易ならしむる捷徑なればなり』と公言したる筆法と同じく、他國を其領土に入るゝは侵略にあらずして、寧ろ其救濟なりと感ずるもの尠からず、嗟吁此の傲慢心此の無禮心、焉んぞ我大和民族と相容るべけんや。吾人が一時歐米を崇拜し、此れも舶來、彼れも舶來と稱揚する時代には、心醉の結果として、我れより歐米化せられて得々たりしことありと雖ども、一旦飜然として其本に復り來りしときには、又た我が獨立心を發揮することを怠らざりき。而して之と共に宣教師の感化力に衰頽を來しぬ。顧みれば保羅が歐洲に傳道せしとき、回教徒が東亞に傳道せしとき、チストリアン派が支那に傳道せしとき、孰れも己れの國家を忘れて行きぬ、是れ其成功したるゆえんとす。『ゼスイト』が最初我が國に傳道せし時も亦た己れの國家を忘れて來りしなり、然れども其後其本國と關係を結ぶや、漸く國家的野心を抱くに至れり、是れ其始めに成功して終りに敗れたるゆえんとす。

みならず、其後に軍艦を擁して傳道し、動もすれば膠州灣事件を惹起せんとす。其傳道に失敗するや當然と謂ふべし。

之を要するに歐米人の外國傳道は失敗に終れり、而して其失敗は、實に我國の幸福なりき。若夫れ彼をして成功せしめんか、我れは其奴僕たらざるを得ず、迷信無學の徒たらざるを得ず、而して或は國家的大憂慮を惹起したるや、亦未だ知るべからざりしなり、吾人は彼等の失敗に大萬歳を唱へざるを得ず。

其れ然り然れども吾人は加藤弘之氏の如く、基督教を以て我國體

に害あるものと觀ずる能はず、又た半可通の軍人の如く、之を以て賣國奴を製造するものと爲す能はず、却て活道德を鼓吹し、愛隣愛國の精神を涵養せしむるものと爲すに躊躇せず。但夫れ前條の次第なるを以て、こゝに輸入的基督敎に終焉を告げしめ、更に我國に於て獨立的基督敎を起さゞるべからずと主張するもの也。吾人は我道會を以て、敢て此所謂る日本的基督敎なりと稱するものにあらず、蓋し吾人の主張は不朽の道に在り、不磨の眞理に在り、是故に敢て日本的と謂はず、又た歐米的と謂はず、基督敎とも謂はず、何敎とも謂はず、只夫れ信神、修德、愛隣、永生の四綱領を揭げ、同志者を誘ふて之れに合せんことを勉むるにあるのみ。然れども今や從來の基督敎も革命を來し、殆んど吾人と其主張を同せんと欲する傾向あるにより、若しも日本的基督敎なるもの起るとせば、必ず吾人と其歩武を齊ふすべしと信ずるものなり。其は兎も角も吾人はこゝに輸

入的基督敎に終焉を告げしめ、而して今後は我れより二十世紀に於ける天啓敎を將て歐米諸國に傳道すべしと爲すものなり。

原料的基督敎

基督敎の內外を觀るに、笑止千萬の事ども多し。內には宗派の分裂ありて、互に基督敎を我物なりと主張し、畢には反目嫉視の餘、果ては干戈を執て、相殺傷するに至れり、歐洲の歷史能く之を證す。外には種々の批難あり、曰く基督敎は國體に反す、曰く基督敎は愛

國心を喪失せしむ、曰く基督教は賣國奴を生ず、曰く基督教は社會主義を鼓吹するものなり、曰く基督教は人を軟弱に陥らす、曰く基督教は何んだか變な女の腐つた樣な人種を造ると、而かも此等の批難は何れも基督教の本質を知らず、即ち之を貫く不朽の道なるものを見ず、妄りに其皮相と現象に據るもの、是故に吾人より之を觀れば、加藤弘之氏の議論の如きも、丸で相手にする氣にはなれず、老人の冷水、止せば宜いのにと思ふに過ぎず、殊に大得意となりて、『基督教徒窮せり』と大聲疾呼せらるゝ狂態に至りては、實に噴飯の外あらざるなり。夫れ基督教は耶蘇に源す、耶蘇の說きたるもの何事ぞ、熟々福音書を繙きて當時の歷史を研究し、更に目下の發見に依りて斷ずるに、耶蘇の說きたる根本的教理、即ち原料的基督教なるものは、極めて單純なるものなり。先づ耶蘇は第一に神の存在を說けり、而して此神を吾人の父たりと說明せり。第二には此神の子たるべしと勸め、此神の子とならんには、己れの罪を悔ひ、人の罪を議すべからずと教へたり。第三には已に此神を父と爲したる人類は互に兄弟姉妹たれば、よろしく相愛して此世を渡るべしと誡しめたり。第四には未來の存在を說き、善惡の應報を明かにし、人生は此世のみにて終るものにあらずと啓示せり、思ふに耶蘇の說きたる根本的教理なるものは、尙ほ此外に多くあるべしとも覺えざるなり。然るに基督教の諸宗派は其說を二百四十餘種に分ちて相爭ひ、互に本家本元を主張し、古往今來未だ曾て合一する能はざるは何故ぞ、曰くこれ原料的基督教を忘れて、製造的基督教に迷へばなり、耶蘇の說きたる根本的教理は前述の如く單純なり、而かも各々好むところに阿るが故に、畢には全く相反するに至れる也。例へば神は父なり、人類は兄弟姉妹なりと說くところより演繹せば、こゝに社會主義の教派を生ず、然れども耶蘇は階級打破の主張者にあらず、其の

奴隷をすら解放せよとは說かず、更にカイザルのものはカイザルに還し神のものは神に還せと答へたるところ、若くば羅馬書十三章に據り、爰に神權說なるもの案出せられて、監督敎派若くは天主敎派を生ず。神を父となし人類を兄弟と爲すの敎理には異同なし、然れども米國に行くときには、共和政治の基督敎となり、英國若くは露國に行くときには立憲的若くは君主的の基督敎となる、原料は同一なるも、製造するものによりて其形を變ずるが故なり。更に基督敎が支那安南朝鮮等に行くときには、こゝに賣國奴若くは非愛國者を生ずる傾向あり、然れども日本に於ては其れ如何、不肖我輩の如きも、明治十二年の頃、米國宣敎師の暴慢を憤り、蹶然衣を拂ふて築地神學校を出でしより、基督敎を奉ずることに於ては異同なかりしも、外國宣敎師に傳道せらるゝを潔しとせず、多年獨立論を唱て渝らざりしものなり。我國に於ても一時歐米崇拜の基督敎信者を出したるこ

ことなきにあらず、然れども其飜然として猛省し來るや、今日にては、殆んど賣國奴に類するものあるを見ず、否、吾人は今日に於て斷言す、眞に今日日本國家の前途を憂ふるものは、政治家よりも敎育家よりも寧ろ基督敎徒に多かるべしと、左れば安南に行て國を賣るもの、日本に來りて國を愛するものとなる、基督敎に異同なきも、受くるものに由りて異同あるなり、或は贖罪的敎理によりて、柔弱的敎派を生ずることあるも。更に山上の遺訓を奉じて、修德的向上の工夫に努むるものあり。其一局部を見て論ずべからざるや明かなり。

然るを根本的敎義に據りて基督敎を斷せず、又た其變態の由て來るところをも討究せず 漫りに其好むところによりて宗派を爭ひ、一面一局を執へて是非を論ず、滔々たる基督敎論者、多くは皆兒戲に類す。夫れ我道會は、此の根本的敎理に據りて立つ、信神、修德、

愛隣、永生の四條即ち是れなり。然れども此四綱領の外、何事をも信ずべからずと主張するものにあらず、此四信條をさへ信ぜゝには、此他に如何なる教義を信ずるも妨げずと爲すものなり。此故に我道會にては、基督の名によりて祈るものあり、基督の名によらず、直に父に行くものあり、洗禮を受けたるものあり、宣誓署名にて濟ませしものあり、聖書の記事を悉皆默示と信ずるものあり、高等批評に依るものあり。一面より之を見れば頗る統一を缺くものゝ如し、然れども統一なるものは、ソンナ議論を一致せしむる上に存せず、只だ信神、修德、愛隣、永生の四條を實行せしむる上に存すと知らずや。勿論他日我道會より更に宗派の分別を見ることあるべし。然れども千載の後に至るまで、苟も道會の分流ならんには先づ此四綱領を遵奉し、其他の教義は、各自の自由に任すべき筈なれば、原料と製造物とを同一視する如き從來の誤見に陷ることなかるべしと信ず。

夫れ道は一なり、其大觀より論ずるときは、所謂る原料的基督教と云ふものも、亦た大宗教内の一派と見るべし、或は佛法と云ひ、回教と云ひ、儒道と云ひ、ソクラテス教と云ふも、亦た大宗教内の一派也。

然則其所謂る大宗教とは何物ぞ、曰く得て名くべからず、但だ此の大宗教より基督教出で、此基督教より諸宗派出で、此諸宗派より種々の聖賢豪傑を出したるも、畢竟ずるところは皆時代時代に使役せられたる天國の建設者に外ならずと見るべきのみ。

此大觀あるものにあらずんば、與に二十世紀の基督教を語るに足らざるなり。更に史を把て之を看よ、基督教は時代と境遇によりて變態せしも、其原質は古往今來未曾て變ぜざるなり。彼の變ずるものと此變ぜざるものとを識別して、而して基督教を論ずるものにあらずんば、與に大局的基督教を語るに足らざるなり。目下陸軍省幷

に文部省あたりに半可通先生の迷誤に陷らんとするものあるを聞き乃ち爰に一言を呈す。

聖書改造論

一友あり來り詈て曰く、汝迂なるか將た慢じつゝあるか、聖書改造論を唱ふる如きは、沙汰の限りと謂はざるべからず。此くの如き實書は、之を聖處に祭り置き、決して之れに觸るべからず。恰も中世紀に於ける天主教の智策に倣ふべきなりと。予曰く謹んで命を聽く、而かも君は之を用ゆべしと爲すか、抑々又た之を用ゐざらんと欲するか。かれ中世紀の天主教は之を公衆に用ゐしめざりしなり、偶々之を用ゐしむることあるも、依らしむべし知らしむべからずの主義にてありしなり、而かも此れ今日に行はるべきことなるや否や。又已に之を用ゆべしとせば、君はアダムエバの物語を如何にや說く。之れを事實と說くべきか、是れ學術と歷史に反す、乃ち虛僞を語るものとならざるを得ず。之れを神話と說くべきか、乃ち原罪說は斃れざるを得ず。已に原罪說にして斃れんか、保羅の贖罪論も亦た斃れざるを得ず。保羅の贖罪論にして斃れんか、保羅の書翰を如何にや說くべき。且つ夫れ使徒行傳に其歷史を示し、ガラテヤ書とヤコブ書とに兩大使徒の爭論を傳ふるとき、君は如何に此兩雄、否、兩書を調和し得るや、若夫れ調和し得べしとせば、君は保羅とヤコブの上に立つものなり、予輩の改造論よりも、猶ほ大膽なる主張と謂

はざるを得ず。加之かれ男色を說く如き、割禮を論ずる如き、親子の濫行を畫く如き、今日何の敎とやなるべき、若夫れ婦人にして其意を問ふものあらば、君は如何に之を說明せんとするや。然而しアプラハムの夜這の如き、ヤコブの奸策の如てノアの裸體の如き、

きは、あらずもがな。

吾人は『基督が我れ豫言者を廢つるが爲めに來れるにあらず』と云へる一語中に、玄妙の意味あるを知らざるにあらず、而かも歷史上若くは學術上、已に事實なり若くは事實ならずと確定したるものを執へて、猶ほ之を曖昧に附し、いつまでも牽强附會の說を吐く僞物若くは姑息者たることを恥づるものなり。君今や無責任の地に立つ、こゝを以て聖書を祭り上ぐるの議を呈す、而かも責任の地に立つものに代りて、更に考一考せよ、直に實際問題の大困難に遭遇せざるを得ず。予の聖書を尊崇することや、敢て君等に劣るべしとも覺へ

す。君が之れを祭り上げんと欲するに引き替へ、予が之を今日の世に用ゐしめんと欲するに見ても知るべきなり。こゝを以て予は先づ純粹無雜の耶蘇傳を編し、次で保羅及び諸使徒の書翰中より、不朽の道を拔き、之れに古今に亘る諸聖賢の啓示を附し、之をして東西兩洋即ち宇內の經典たらしめんと欲するなり。猶太人は奇蹟を求め、希臘人は智慧を求む、左れば之れに向ひたる使徒等の說法は、亦た自ら猶太的若くは希臘的たらざるを得ざりし。然則今日の宇內に說くもの、亦た今日の宇內に說くの覺悟あらざるべからざるや論なきにあらずや。君は聖書を殺さんとし、予は聖書を活さんとす、乃ち聖書を崇敬する心念、君に深きや。僕に深きや。予自ら顧みるに、敢て沙汰の限とも覺へず。迂慢は君の評にぞ委せんと。かく陳べ來りて一嘯すれば、一友默々、服するが如く服せざるが如く、只だ其頭を頷かせつゝ去る。

我黨は基督教會に屬するか、將た屬せざるか

内村鑑三先生主筆の『聖書の研究』に曰く

（我等は神の默示に由りて、イエスは萬物の主なりと信ずることを得るなり、孔孟釋基と稱して、イエスを聖賢の一人と見做す者の如きは、彼を淺く解するものなり、基督教の立つか倒るゝかは、イエスの性格問題に由て決せらるゝなり、彼にして單に人ならん乎、福音は其根底に於て壞るゝなり、我等は全力を注でイエスの神性を維持す可きなり。

由是觀之、我黨は確に基督教會に屬せざるものなり。何んとなれば我黨は内村先生の謂るゝ如く、イエスを聖賢の一人と見做し、之を

特別絶對の人格と見做さざればなり。

過日ユニテリアン教會の三並良先生、來られて曰く、今回我等基督教會内に於て、進歩的思想を懷けるもの、若干相集りて、一相談會を開かんとす、君請ふ之れに參せよと。其時予答へて曰く謹んで命を聽く、而も先生は猶ほ我黨を指して基督教會に屬すと做すか、若しも先生等にして、能く我黨の主張を知悉せば、恐くは基督教會に屬するものに非ずとして拒絶せられんや、亦未だ知るべからず、先生以て如何と爲すと。先生曰くマーそんな事を云はないで來給へと。既にして海老名彈正、安部磯雄、三並良三先生の發起にて、前陳の集會を開くべき案内を受るや、謹んで之れに參じ、先づ劈頭に問て曰く『さて諸君、我等相結んで茲に日本教會なるものを起す。是れ諸君の知らるゝところ、然るに我黨は耶蘇を見ること諸聖賢に齊し、乃ちたとひ基督なくとも、我黨の宗教は存在することを得るも

のとす、而かも猶ほ之を基督教會に屬するものと見做すべきか、將た之れに屬せざるものと斷ずべきか、言ひ換れば、基督なくとも基督教は存在するものなるや否や』と。海老名先生の曰く、勿論基督なき基督教なるものはあらずと、岸本先生の曰く、ナニ基督なくとも基督教は存在すと、高木先生の曰く、松村君の意は能く分つて居る、松村君は基督教會の陽明派なるものなりと。然而して予は之に就て、何んとも謂はず、唯だ我黨は『信神、修德、愛隣、永生』の四條を奉じ、之を行爲に施すものゝ團體なる日本教會に屬する此の一事を知るのみと言ひて止みぬ。

人或は謂ん、是れ寔に曖昧の態度なり、自ら基督教に非ずと信ぜば、大膽に基督教に非ずと表白すべく、若し又た之れぞ眞正の基督教なりと信ぜんか、潔く其義を公言すべし、一には基督信者を畏れ、二には世間を憚り、前寔後跋の醜狀殆んど見るに堪えざらんとすと。

噫、自ら小とするものゝ言や、皆概ね此くの如し。羅馬教は曰く、吾れこそ眞の基督教なれと、希臘教は曰く、否、否、吾こそ眞に基督教の正統を受くるものなれと、然而して新教各派の數十教會は、皆互に叫んで曰く、否、否、否、吾れなり、吾れなり、吾れなりと。吾人豈焉んぞ此等の仲間に伍して、更に一個の宗派を爭ふの痴態を演じ能はんや。

於此乎人又た問はん。汝は基督教會に屬すとも云はず、將た之れに屬せずとも云はず、而も一個の宗教を說くものたるや爭ふべからず、然則汝はこゝに新宗教を樹立せんと欲するものかと。曰く是れ亦た自から識らざるなり、之れが新宗教たるべきか、將た之れが舊宗教を祖述するものたるか、是れ亦た敢て論ぜざるなり。唯だ夫れ吾人は、信神、修德、愛隣、永生の四條を奉じ、之を行爲に施さんと誓ふのみ。

於此乎人あり側面より笑て曰く、凡そ宗教は大人格を待て生るべきもの、信條を以て製作せらるべきものにあらず、今や汝は釋迦の頭を盜み、孔子の腹を借り、基督の手足を雇ひ來りて、こゝに總合的宗教を起さんとす、而かも人其人にあらざるを以て暫く不分明の言を爲すのみと。然り、吾人は固より其人にあらざるを知る、而かも吾人の提唱する不朽の道なるものは、簡易明白にして、亦た之を爭ふ餘地あらず、而して孔孟釋基を以て、畢竟斯道の注脚に過ぎずと做すが故に、敢て此れに隷し彼れに屬すと云ふ能はず、而して唯一の疑問は、此れが果して信條にのみ止まるべきか、將た宗教的生命たるべきかの一點に在りしが、今や吾人は事實を以てこれに答へ得べき時機に達せり、即ち今や日本教會は、組織以來已に三年の星霜を經て、いよ〳〵我が理想的目的を達するを得たりき。

吾人は我が日本教會を組織する當時、自ら顧みて斯く想へり、曰く吾人は最早我身の基督教徒たるや否やを判ずるに苦しむものとなりぬ、而かも其の神を拜し、德を修め、隣を愛し、永生を信ずるの一事に至りては、依然として變ずるなく、啻に之を教理の上のみと謂はず。眞に之を靈覺し、眞に之を悟得し、眞に之を我が生命たらしめつゝあるは、事實にして亦た他人の議論を許るさず、然則、已に茲に斯の我れあり、豈之を他に及ぼすこと能はずと謂はんやと。尤も吾人は曾てユニテリアン若くは獨逸教會派の蹉跌に鑑みるところあるを以て、我が四個たるべき信條を七個となし、聖靈、祈禱、交神の三事を之れに加へ、勉めて靈的經驗の方面に重きを置きぬ。然るに其後我教會の經過如何を顧みるに、決してユニテリアン若くは獨逸派の沽轍に陷らず、たとひ基督の贖罪を信せずとも、耶蘇を聖賢の一人と見做すとも、其能く神と交りて、聖靈の感化を受くるの一事に至りては、決して基督教徒の後に落ちず、否、却て基督教

徒を凌駕するものあるを發見するに至れり。或者は曰く、予は曉天に起き出でゝ、武藏野の東天より旭日の登り來るを見るや、一種の靈氣に打れて、思はず知らず感謝の祈禱を捧げたりと。或者は曰く、予れ深山に坐して、省察に耽る中、神の靈我れに來り、予をして祈禱せしめずんば止まず、我は聲を揚げて、天父よと叫び、我心に未だ曾て味はざる靈的經驗を味ひたりと、是れ皆生命の聲にあらずや。更に或者は曰く、從來の基督敎徒は、頭を以て神に祈る如きも、今や予は腹を以て神に祈るの勝れるを發見せりと。又た曰く從來の基督敎徒は事毎に祈るも、予は神前に在て不斷の祈禱を捧ぐるものとなりと。ア、吾人は之を聽て驚喜止む能はざりき、果然、吾人は啻に理論にのみ止まらず、いよ〳〵靈的經驗の人を出しつゝあるなり、而して最早や聖靈、祈禱、交神の三事を加へず、單に之れを信神の中に包含せしむるとも、亦た心配なきに至りし也。

形式儀文に於ても、亦た同じく進化しつゝあるなり。吾人は最初入會式に洗禮を用ひたりき、然ども已に三位一體說を信ぜざる吾人にとりては、其無意義なるを覺りしを以て、更に之を宣誓記名に改めぬ。吾人は、最初基督敎の讃美歌を用ひぬ、然れども其の我主張に反するもの多きを以て、今や選んで之を用ゆることゝなし、更に特殊のものを編せんとす。吾人は最初說敎前後には、必ず聖書を朗讀せり、然れども今や聖書の代りに、中庸論語等を用ゆるも、亦た妨げずとなしぬ。吾人は最初聖書を改造すべしと主張せり、然れども今日に於ては最早や左樣なる因循に出でず、直に聖書の一部と、諸眞人との敎訓に據りて、所謂る不朽の道、不磨の眞理を說明する一書を編纂すべく決議せり。吾人は今猶ほ結婚葬式等の儀式には、主として基督敎式を用ゆ、然れども追次如何に改正し、如何に變ずべきか、是れ亦た豫知すべからざるものあらんとす。然則吾人は今

猶ほ基督教會に屬するものか、將た之れに屬せざるものか、是れ豈一大疑問にあらずや。

人更に謂はん、汝は多年基督教會に養はれたるもの、而して汝の所謂る『信神、修德、愛隣、永生』の語も、亦た正しく基督教より得たるものとす、然るに猶ほ自ら基督教外に在りと爲すか。加之汝は今更基督を無みし、基督なくして、こゝに宗教團體を設くべしと云ふ、何んたる驕態ぞ、何んたる忘恩漢ぞと。予れ之れに答へて曰はく、今や基督は吾人に告ぐるに、最早や聖書的基督教に泥せず、進んで諸教を融和し、宜しく大道に合すべしと宣し給ふ、是れ基督が猶太の豫言者より承けて吾人に傳へ、吾人が更に之を後世に傳ふべき啓示と爲す、豈之を驕態と云はんや、忘恩漢と云はんや。殊に吾人は斯道を耶蘇より得たるよりも、恐らくはヨリ多く之を孔孟より得たりとす、吾人は十九歳にして耶蘇に從へり、然れども孔子には、七

八歳の兒童時代より事へ居るものとす、其恩義の大小未だ俄かに判ずべからず。嗟呼彼れ耶蘇に附して孔子を詈り、孔子に隨ふて耶蘇を擯るものゝ如きは、是れ孔子の弟子にもあらず、亦た耶蘇の弟子にもあらざるなり。然而して若夫れ今日の時に處して、吾人が不朽の道を提げて、こゝに宗教の一團體を起すを見ば、耶蘇たり、孔子たるもの、皆相顧みて是れ我意を得たるものなりとて喜ばれん。魯鳥は太牢を視て憂悲し、鷃鴳は車馬と鐘鼓に驚愕す。今の時に當りて、宗教の分類を問ふものすら、已に迂なり、況んや宗派を問ふものをや。坳堂の杯水には我大舟を容るゝこと能はず、野馬也塵埃也、天の正色に支障なし、吹て以て遊ぶべき而已。

東西道德の長短

西洋人は社會道德に長じ、東洋人は個人道德に長ず。子輩が不朽の道に詳說したる如く、歐米の富豪家が、慈善事業、若くは傳道事業に喜捨する金額は驚くべきものにて、北米合衆國のみにても、年々幾億圓を以て數へらる。日本の富豪家が往時には爵位を買はんと欲して、海防費を献じ、近時は官邊の御愛顧を蒙らんと欲して、教育界に寄附したる外、絶て公益の爲めに盡したることなき類にはあ

らず、其間月鼈の差ありと謂はざるべからず。又歐米人は到るところに教會堂を有す、海水浴場にも、避暑山中にも、苟も人衆の集るところには、必ず教會堂の設備あらざるはなし、而して若し之れ無くんば之を新築するを例と爲す。斯くて日曜日の來るときには、信者も未信者も、商估も學者も、皆之れに集り、外面のみにても、先づ禮拜の式に預るを例とす。習慣の然らしむるところとは云へ、之を美風と謂はざるべからず。我日本が八萬の寺院と、十二萬の僧侶を有しながら、其勢力と感化とは、今日殆んど皆無に屬し、海水浴場若くは避暑地に於ては、寺院と貸別莊と相競ひ、僧侶と客引と相爭ふの醜体を演じ、吾人をして長嘆太息を禁ぜざらしむ。更に歐米に於は、所謂る公德なるものゝ稱道せらるゝを以て、公園の花卉折らるゝことなく、宴會の秩序紊るゝことなしと雖ども、我日本に於ては果して如何、近時稍々改りつゝありとは云へ、未開の蠻態、今

猶ほ吾人をして双眉を閉ざしむるものなくんばあらず。我東洋人の歐米人に及ばざるや遠しと謂ふべし。其れ然り然れども此は社會道德に於て然るのみ其個人道德に至りては、我れの彼れに優るもの多々あるを見る。我知友田村新吉君曰く、米人の性質は、將棊を鬪はす時に最も顯はる。我れ彼れを詰めんとするとき、チョット彼れに注意を與へ、彼れに一片の情を示すこと度々あるに引き替へ、彼れが我れを詰めんとするときは、不意に我れを襲ふて得意と爲し、骨つて我れより受けたる一片の俠懷に報ひざるのみか、心中却て我れの愚態を笑ふに至る。彼れには利害ありて情なく、理論ありて意氣尠しと。而して之れ予が歐米人と交際したる二十年の經驗に由るも、一々心當りのあるものとす。内田貢君曰く丸善書店に來る歐米人の内、猥りに新書の封頁を切り放ちて之を讀みながら、其儘之を買はんともせず、平然立去るもの尠からず、是れ日本人の情に於て忍ぶ

能はざるものなるべしと。更に我國より英國に歸りたる一女教師あり、我友人某より東洋思想を紹介したる一原稿を受取ながら、屢々催促するも畢に之を返へさず、竊かに此原稿を利用して、己のが東洋事情を演說するの材料に供しつゝあるものゝ如し。然而して我が實驗談のみにても、かゝる材料を供するに尠からざるものあるを覺ゆ。之を要するに歐米人は、社會道德に長ずるも、個人道德に缺くるところあるが如し、而して偶々個人道德に饒むが如く見ゆることあるも、つまり自己の道樂即ち嗜好心を喜ばすがためになしつゝあるものを多しと爲す。歐米人は利害に動き、東洋人は意氣に動く、歐米人は理に强く、東洋人は情に富む、歐米人は十字軍以來激烈なる生存競爭の社會を經過し來りたるもの、東洋人は久しく太平の夢を貪り居りしもの、歐米人は己が國家若くは己のが社會と、他の國家若くは他の社會と、絶へず興廢存亡を爭ひ來りたるもの、東洋殊

に我日本の如きは、歐米の國民に觸るゝまでは、更に我國家若くは我社會の存亡を掛念するに及ばざりしもの、是れ歐米人と東洋人の間に、道德の長短を異にするに至りたるゆえんとす。

嗟吁今や我國も世界の風濤に乘り出しぬ。於此乎同乘者は皆相警して、我國家即ち我社會を思ひ、次第に公德を重んずるに至らんとす是れ喜ぶべきことなり。然れども左る代りに注意せよ、其生存競爭の激甚なるに伴れ、人情は次第に薄らぎ、畢に個人道德に衰退を來すの恐れあるべし。然而して歐米人も亦た今や我れの意氣を蔑し、我れの厚情を愚視して不德の行爲を我れに仕向けつゝあるも、見よ將に我が所謂る『義理と人情』と云へる美德を味ひ、我が個人道德に感泣するものとなるべきなり。

顧みれば基督敎は歐米の社會に傳はりぬ。こゝを以て其開祖耶蘇は最も個人道德に重きを置きしものなるにも拘はらず、今日迄の基

督敎は、個人道德に於て大に缺くところあらんとす。於此乎若夫れ之れを我日本に傳へ、彼國に發達し來れる社會道德を我れに入れ、我國に涵養せられたる個人道德を之れに加へ、東西道德の長處を融和し來て、之を我國に生長せしめなば、庶幾くは我日本に於て、此基督敎の完成を期することを得んぬ。而して是れ我日本敎會が大に任せんと欲するところなりと知るべきなり。

神人合一の妙趣

一藝に名あるもの、以て道を語るべし。梓慶は工人のみ、而かも其説くところや直に神人合一の奥義なり。聞之、關西に一理髪者あり、敏にして精力不斷なり。或人之れに問ふて曰く、汝何んの術を以て、能く斯に至るやと、理髪者答へて曰く、へー私には別に如此と申上げるほどの事も御座りませぬが、チー旦那、他の者は皆手と目と鋏とで理髪して居るのですが、私は腹で理髪して居るのでして御座

りますと。嗟吁斯腹なり、斯腹なり、書畫、彫刻、擊劍、柔術、射御、水泳、皆此腹に據らざるはなし。於此乎諸君は問はん、抑々斯腹とは如何なるものぞと、曰く口以て言ふ能はず、手以て示す能はず、かの朕に對するものと一般、廓然無聖にして、遂に不識と答へざるを得ざるものとす。

今や泰西の理窟輸入せられて、一も理窟、二も理窟、理窟にあらずんば人服せず、理窟にあらずんば用ゐらるゝことなし。然りと雖ども此理窟たる、果して何物をや説明し得る、理法と仰がれ、科學と尊稱せられ、技藝百般は勿論の事、政治、經濟、教育、宗教に至るまで、皆此の泰西的理窟の捕虜となり、今や教育とは全く此理窟の受授處となれり。賀すべきか、將た吊すべきか、其賀すべきところより之を謂はゞ、此理窟の爲めに大艦浮び、此理窟の爲めに電氣馳せ、此理窟の爲めに立憲政體起り、此理窟の爲めに典章文物煥乎

として見るべきものあるに會へり、蓋し當今の文明とは、此の理窟の權化たるに外ならず。難有き事と謂はざるを得ず。其れ然り然れども更に吊すべき方面より之を謂はゞ、此理窟の爲めに教師は物を教ゆる機械となり、生徒は學校屋に出入する華客となれり、此理窟の爲めに、主人は雇人を買ひ、婢僕は身を賣る關係となれり、此理窟の爲めに、父子の至情も疑はれ、愛國の誠意も笑はれんとす。否、此理窟の爲めに音樂も、美術も、宗教も、皆盡く實用如何を問はれんとす。嗟吁已みなん已みなん。汝理窟の外道よ、說明の皮相家よ。汝の智識幾許ぞ、汝の五管將た何物をか知悉せん。言外に言あり理外に理あり、實在は却て汝の知らざるところにありと知らずや。工人の天、理髮者の腹、是れ果して何物ぞ、天地氣あり、磅礴として萬物に動く、此氣果して何物ぞ、人間氣あり、迸乎として五體に活躍す、是れ果して何物ぞ、鳥の囀じ、蝶の舞ふ、山の峙へ水の流る、

生々又生々として、生命の流通盡くる時あることなし。意志の動くところ、造化の現はるゝところ、汝能く其源を知るや。我れ靈眼を開て天門を仰げば、ヤコブの雲梯我前に開けて、天父の御座極めて近し。我れ密室に坐して默禱すれば、聖靈の聲我耳に明か也、我れ之を言ふを得ず、他人又た之を聞くを得ず、昔者は劍客心を說き、今は末者其技を說く、昔者は聖賢自得を說き、今は博士其糟魄を講す、技や說くべし、糟や講ずべし、而かも心や自得や終に說くべからざるなり。則ち說くべからざるを知ると雖ども、猶ほ之を說かんと欲す、是れ孔夫子の天下を廻りたるゆえにして、更に又た言無らんを欲すと大息したる消息なるべし。然則神人合一の妙趣は、それ終に說くべからざるか、曰く請ふ見よ。菫花一輪籬邊に笑ひ、流螢點々窻前に飛ぶ、神人合一の妙趣たる他なし。先づ此の天地の自然に同じ、更に宇宙の大靈に合するに在る而已。

愛隣の主張

凡そ人魂の大小高下は、愛隣の精神を抱くや否やに由て定まる。如何に位高く家富むとも若夫れ自己一個の爲めのみを慮り、一念の國家に及ばざるものは、小人のみ、鄙夫のみ、たとひ陋巷に炒豆を嚙り、褞袍を纏ふて盛宴に坐するとも、心、國家に及び、眼、愛隣の事業に注ぐものは、大人也、君子也。顧みれば我國、國家精神の衰へて、人魂の委縮したるや太甚矣、維新の豪傑も、老ては則ち得

を思ひ、自由民權の名物男子も、末路畢竟女郎と化せり、然而して生存競爭の波濤に搖盪れ、生活難の嶮路に喝ぐ一般の人民は、皆己れ一個の生計に疲憊し去りて餘力なく、今や愛隣の主張を呼んで、古代の遺物、舊式の說法なりと剛笑するに至る。國民靈魂の下落、國家元氣の衰耗も、こゝに至りて極矣と謂ふべき也。

夫れ我日本敎會員(今の道會)は、悉く皆天下の志士を以て任せざるべからず、身を殺して仁を爲す底の覺悟を爲さゞるべからず。論者曰く敎會に於て、國家を議し、社會を論じ、天下を說く如きは、說敎にあらずして演說なり、畢に敎會を俗殺せずんば止まざるべしと。予曰く然らず、吾人は信神永生の部に於て、宗敎の本體を說き、修德の部に於て修養を講ず、是れ論者の所謂る神聖と呼び說敎と稱ふるところのものたるべし。然れども吾人の信仰より觀るときには、國家も社會も天下も皆悉く神聖なるものなり、而して愛隣の主張の

如きは、我教會に於て最も要部を占むる説教たるなり。夫れ神を拜し、德を修め、かねて永生を念ずるとも、若夫れ愛隣の事業に及ばざるときは、其宗教たる畢竟一個人に局して終らんのみ、かの安心立命のみを以て、宗教の眼目と見做すものゝ如きは、畢竟利己に墮するもの、與に志士救世の大業を語るに足らざるなり。

今や我國に於て、國家的精神を鼓吹しつゝあるもの何處にある。國家的精神の衰へたるや前述の如し、而かも此際奮然起つて、之れが挽回に從事せんと欲するもの極めて尠し矣。我日本教會は、創立以來日猶淺し、こゝを以て其感化の及ぶところ、固より見るに足るものあらずと雖ども、而かも總ての教會、總ての寺院と、大に其趣を異にし、凡そ我教會に入り來るものは、皆悉く愛隣の精神を養ひ、教會は愛國の志士の團體にして、會員は愛隣の事業の分擔者なりとの覺悟を抱き、我大日本帝國の政治をも、實業をも、教育をも、皆

悉く吾人の理想を以て改善し、革新し、遂に我日本社會を征して之を吾人の手中に收めざるべからずと主張するもの也。昔時蘇國のパックスは禱て曰く、『我れに蘇國を與へよ、然ざれば我れに死を與へよ』と。吾人の祈禱も亦た之れに外ならざるなり。然而して愛隣の事業なるものは、單に我日本國内にのみ止まらず、支那、朝鮮、印度、其他の東洋諸國にも及び、我黨の主義主張を以て、彼の國を救ひ、彼の民を新にし、彼れの政治、宗教、實業、教育其他百般の上に、一大光明を與へて以て、新天新地を開拓せしめざるべからずとなすもの也。

顧みれば物各因て起るところあり。維新志士の蹶起には、山陽一流の鼓舞大に與つて力あるものとす。薩に西郷大久保等の起り、長に山縣井上伊藤等の出づる、皆是れ先進者の鼓舞に由る。今や我日本社會には、國家的精神を鼓舞するものに乏し、此時に當りて我教

會出でたり、未だ見るに足るものあらずと雖ども、豈將來に影響するところなしとせんや。我教會に於ては、宇内の形勢をも說くなり、東洋の狀態をも談ずるなり、我國の政治、教育、實業をも論ずるなり、而して皆悉く之を神聖視し、我主張を以て之を啓發し、我が團體の力を以て之を率導し、遂に之を潔めて以て我が神前に献せんと欲するものなり。後日若し我國に志士仁人の起るあらば、則ち我日本教會より起るべしと期するものなり、後日若し我社會に愛隣的大事業家の起るあらば、則ち我日本教會より起るべしと期するものなり。夫れ我教會は、團體としても個人としても凡そ我が勢力の及ぶ所には、必ず國家問題若くは社會問題に熱中し、愛隣の事業を企つるものと知るべき也。

精神界の征服者

我黨は精神界の征服者を以て任ぜざるべからず。例へば諸君學生なるか、然則帝大、一高、高師、高商、早稻田、慶應等の諸學生中、諸君の征服すべき者、幾千若くは幾萬あるかに想到せよ。予嘗て一日早稻田大學の門前を過ぎ、幾十幾百の學生の往來するを見てつら〳〵其の面貌を察するに、意氣衝天の氣は之れあり、鳳翥龍變の概は之れあり、巨額瞶眼、學思共至の秀才は、之れあるものゝ如し。

然れども彼等の中、上は天に對し、下は人に對し、至誠惻怛の情に燃ゆるもの幾人ありや。彼等は大西郷の言行錄を愛誦す、而かも其れ唯だ愛誦するのみ、未だ其人たるの道を知らず、螟蛉、子あり、蠃螺之を負ふ、吾人の任や方に急なりと感じたることありき。然るに諸君は日に之と交はり、夜々之れと語る。何んぞ其理想の卑しく、其人生觀の貧なるを見て、之れに說き、之を導き、之を負ふて、而して我黨の人と成らしめざる。又たもし彼等の中、放蕩、遊惰、狂暴、惡癖等の爲めに、其身を誤らんとするものあるか、是れ皆諸君が征服して以て我黨の陣中に伴ひ來るべきものにあらずとせんや。

諸君は實業家なるか、我國今日の實業家を見よ、何んぞ其の頭腦の空乏にして、其人格の陋醜なるや。夫れ今日は國家の富源を計るべき時代となれり。於此乎實業家は、兀として四民の上に現はるゝに到れり。然れども悲しむべき哉、彼等の多くは猶未だ其地位に添

ふべき資格を有せず、即ち未だ彼等は學識を缺く、彼等は一個人的商賣の掛引を知るも、未だ宇內の大勢より打算し來るところの國家的大商賣を知らざるなり。更に人格を討ねんか、彼等の多くは、猶ほ未だ素町人根性を脫し能はざるものゝ如し。其念慮は己れに屬して隣に及ばず、其理想は地上に匐ふて天に上らず、若夫れ利に喩りて、而して義に喩る能はざるものを小人と謂はゞ、彼等は猶未だ其小人たる仲間を脫し得ざるものゝ如し。於此乎我黨の諸君、諸君は已に實業家の先覺たるもの、諸君は已に萬國史を繙て、世界の趨勢を觀じつゝあるもの、更に莊子、論語、王陽明等の學を講じて、自ら其地位を辱かしめざらんことを念じつゝあるものなり。左らば諸君よ、諸君は更に之を人に及ぼし、彼等を導き、彼等を負ひ、彼等をして亦た我黨の人士たらしめざるべからざるにあらずや。

更に諸君は官吏なるか、敎員なるか。將た會社員なるか、今や維

新創業時代を去ること已に四十餘年、而して西郷大久保亦た在らず。於此乎人に鳳翥龍變の希望なく、只だ所在糊口の道を求むるに過ぎざるを以て、其意氣や次第に銷沈し、其義心や次第に滅滅し、遂にお役目御苦勞の人たるに至りて止む。左らば諸君よ、諸君は往て彼等を救はざるべからず、吾人は人に事るのみならず、又た神に事るものなり、吾人の業務は、唯り糊口の爲めのみにあらず、其の如何なる地位に在りて、如何なる事に從ふも、皆各々神と人との爲めに應分の貢献を爲しつゝあるものと知らざるべからず。況んや、鳳翥龍變、必らずしも羨やむべきものにあらず、吾人には別に天地の人間に非ざるものあり、王侯貴顯、必ずしも望むべきものにあらず、彼等は一生諂諛者に圍繞せられて終らんのみ。左らば諸君よ、諸君は彼等の先覺たるもの、往け、往いて彼等を其心的奴隷の境涯より救ひ、彼等をして我黨の如く隨處に主たるの妙諦を知らしめ、彼等

をして、亦た我黨の別天地に入らしめよ。

其他諸君、諸君は到處に彼の偶像拜者を見るべし。彼等の情願や察すべきものあり、然れども其迷信や憫れむべきものなり、諸君の征服の手は、必ず彼等の上に及ばざるべからず。更に又た基佛を始め、數多の宗教的團體を見るべし、彼等は甲に泥し乙に拘し、自ら見聞を將て遮迷に苦しむ、往て彼等に不朽の道を示し、以て彼等を形骸の束縛より脫せしめざるべからず。然而して若夫れ爲政者には、堯舜天下を有て與らざるの氣象を養はしめ、政黨者流には、勿我勿意勿固の大人物に化了すべき要道を學ばしめ、天下の民に向ふては、大人類觀の理想を抱かしめ、更に朝鮮の慘狀、支那の紛亂、印度の悲況を觀るときには、かの保羅がマセドニアより來りて、我等を救ひ給へよと言ふを聽きたる如き感想を起し、又た已に歐米の文明と其宗教とにも、大なる缺陷ありと知るときには、是れ亦た我黨の手

に待つものありと自覺し、以て傳道の精神を振はざるべからず。

之を要するに我黨は學生時代より、實業界に入るも、官省に出るも、會社に雇るゝも、學校に聘せらるゝも、大鵬となるも、鵲鷃となるも、到る處に精神界の征服者を以て自ら任じ、內は死蔭の同胞に向ひ、外は迷塗の人類に對し、吾黨が天と人とに負へる大責任を完ふせざるべからずと謂ふに在るなり。事や大に過ぎ、言や壯に失する恐れありと雖ども、我黨は已に天の使命を信じて出で來れるもの、豈我身の不肖を顧みて遲疑せんや。今日世界を呑吐する基督教と雖ども、其原頭を尋ぬるときには、元と是れガリラヤ漁夫の一團に過ぎざりしなり、而かも其神より出でたるものは、人終に之を滅ぼす能はず、靈火炎々、人と偕に働きて、こゝに大教を樹立し了れり。左らば諸君よ往け、往いて大膽に吾黨の所信を天下に傳へ、到るところに精神界の征服者を以て自から任じ、些少だも自棄自屈の

精神を起すこと勿れ、天命を我れに生す、復た何んぞ躊躇せんや。目を擧げて觀よ、天下は已に收穫の秋となれり。

聖靈の活動

聖靈の存在は、吾人固く之を信ず、我が日本教會の信條に在るが如し。然れども其のペンテコスト的活動は、久しく之を聞かざりしに、今や村井知至兄を通じて、之を聞くを得たり。舊臘より、村井兄の腦裡に、一種不可言の感想起りつゝありき。而して年末に及ぶ

や、此物天來の聲となりて村井兄に臨み、本年の初七日に至るや、忽焉として猛火と化し、所謂るペンテコストの光景を現出せしむるに至りぬ。

本年一月十日の朝、修善寺なる村井兄より飛書あり、曰く、予今回聖靈の啓示により、豁然悟徹したるものあり、又種々の聖想明斷を得たるものあり。因て之を諸友に頒たんと欲す、明夜我家に來れ、予は明朝十時修善寺を發す云々。乃ち其夜田村新吉、石川進の二兄と俱に、村井兄の門を叩けば、野口復堂、村上郊外の二友已に在り、皆村井兄の消息に接して來り會せるなり。予は他事を言はず、茲には只だ村井兄の所謂る得たるものい何物なるかを紹介せんと欲するのみ、是れ實に神聲に相違なければなり。

讀者或は謂はん、松村も尙ほ迷信を說くか、村井氏も尙迷信に動かざるゝかと。然り吾人が嘗て我が信條の說明中にも論じたる如く、

吾人神を信ずるものは、亦た聖靈の活動をも信ぜざる可らず、否、此聖靈の活動たるものは、之を信ずと謂はんよりは、寧ろ事實爭ふべからざるものと謂はんと欲す。耶蘇は之れに導かれて動き、吾が言は吾が言にあらず、天の父吾をして此言を爲さしむるのみと謂へり。保羅は聖靈吾れに告げて宣へりと謂ひ、ペテロは聖靈の降れるを見て、之に洗禮を授けたりと謂ひ、ルーテル、エドワルド等は、聖靈の活動を領けて、新天新地我周圍に開けたりと叫びぬ。之を外敎に求むるときには、ソクラテスは之を神聲と呼び、マホメットは之を啓示と謂ひ、孟子は之を難言の洪氣と說きたり。彼等豈盡く迷信者ならんや。

村井兄曰く、吾れ今年に於て五十に達す、即ち天命を知るべきの時なり。我が天命は何れに在るか、是れ吾が窃かに問ひつゝありし問題なりき。耶蘇曰く、風は己が任に吹く、汝其聲を聞けども、何

處より來り、何處へ往くを知らず、凡て靈に由りて生るものも亦た此くの如しと。實に然り予の經驗も亦た實に然るなり。吾れは如何にして感じ、如何にして悟し、如何にして決せしやを知らず。然れども吾れは一種不可言の靈氣に觸れて、人の耳未だ聞かず、人の目未だ見ず、人の心未だ思はざる靈的經驗を得たり。顧みれば明治十六七年の比、我が同志社に大リバイバルの起りしとき、吾れ同種の經驗を得たることありき。然れども今日とは大に其趣を異にす。當時は單に感情にのみ動きたる傾向ありしも、今や冷靜の頭腦と、明快の心胸と、不拔の意志とを以て、吾が全靈は全く神の靈中に沒入し、初めて天命如何を靈覺せりと云々。然而して自今村井兄が、專ら其心身を精神界に投じ、所謂る預言者となりて其一生を送らんと欲する覺悟を聞くときには、山嶽も之を遮る能はず、河海も之を絕つ能はざる慨あり。又た兄が今日の宗教界を眺めて、其僞善と、迷

信と、無學とに滿つるを觀るや、恰も耶蘇と其憤慨を同ふし、吾れ若し神の聲を傳ふるに至らば、此世に火あり、刃あるべし、而して吾れの末路は、終に十字架たらんとの感想を抱かざるを得ずと。

此外村井兄は。同夜吾人に告ぐるに、諸友人の批評を以てせり。其中には海老名氏あり、小崎氏あり、植村氏あり、宮川氏あり、内村氏あり、孰れも基督教界の錚々たる名士なり、而て吾人をして其明斷に驚かしめぬ。又曰く、吾れ神の靈に觸れて、人物を視、世上を視、百事百物を判斷し來るに、神智靈覺湧て泉の如くなるを覺ふ、吾れは確かに何物かに捕へられ居るを感ず、決して平生の村井にあらずと。於此乎予れ少焉默禱の後、徐ろに村井兄に向ふて曰く。吁是れ淸種なり、決して狂妄者の類にあらず。予は元來リバイバル的動力を高調せしものなり、然れども既に其弊害に懲り、今や之を冷笑し去らんとす、然れども ペンテコストより今日に至るまで、基督

教の傳播は、全く此のリバイバル的動力に由るものたるを知る。一個人に於ても亦た然り、保羅が飜心し、オーガスチンが懺悔したる往時より、今日に至る吾人一個の經驗に徴するも、吾人が基督教に投じたる源因は、神學の議論に由るにもあらず、人の説教に由るもあらず、全く一種の靈動に由ることを確認せざる能はず。吾人は村井兄と共に進歩的基督教に屬し、從來の基督教に對しては、非常なる破壞主義を取るものなり、然れども此一事即ち靈的經驗の一事に於ては、保羅、オーガスチン、ムーデー、エドワルド等と其實歷を同ふし、所謂る正統派基督教に屬するものなり。人は謂へり。ユニテリアン等には靈的經驗なしと、然り而かも是れユニテリアン的の神學を有するが故に然るにあらず、彼れが此方面に注意を拂はざる故に然るのみ。吾人は村井兄と與に其説に於ては、敢てユニテリアンに異なるを見ず、然れども見よ、今や現に此靈的經驗に接する

を得たり、則ち吾人が嘗て唱道したる理想と實際とを、今や村井兄に於て之を證するを得るなり。吾人の歡喜何物か之れに如かんやと。於此乎村井兄も亦た我が説に和して曰く、然り、然り、今に於てか吾れ始めて新舊兩派の信者を覺醒して、相與に靈の一に歸せしむべきを知ると。

嗟吁予は茲に一々村井兄の經驗と其言説とを紹介するの時を得ず、然れども村井兄が聖靈に滿されしことは、予れ今之を確證し、村井兄が今後の傳道界に一大『プロフェット』として現はるべきを豫言して憚らざるものなり。予も亦た天命を受けて今日あるもの、今や村井兄の猛火を得たるを聞き、天國の將に近づけるを知る。

事業的聖靈

今回村井兄の得たるものは靈的經驗の聖靈なり、然れども尚ほこゝに事業的聖靈の存在することを忘るべからず。事業的聖靈とは何んぞや。曰く『主の靈吾れに在す、故に貧者に福音を宣べ傳ん事を、吾れに膏を注ぎて任じ、心の傷める者を醫し、囚人に釋されん事と、瞽者に見させん事を示し、壓制らるゝ者を縱ち、主の禧年を宣べ播めん爲めに、吾れを遣はせり』とは、耶蘇が傳道の劈頭に當り、豫言

者イザヤの言を引て說き宣ひたる一節なり。若夫れ聖靈に滿されんか、疾病を醫し、惡鬼を逐ひ、瞽者に見せしめ聾者に聞かしむる底の一大革命事業を成し遂げ得るや易々たるのみ。耶蘇曰く我が爲すは我が爲すにあらず、神我れに在りて爲さしめ給ふなりと。又た其弟子に命じて曰く、爾曹は久しからず、聖靈によりてバプテスマを受くべしと、又曰く、聖靈爾曹に臨むによりて、爾曹能力を受け、エルサレム、ユダヤ全國サマリヤ及び地の極まで我が證人となるべしと。實にや、耶蘇の弟子の多數は、眇たるガリラヤの漁人のみ、智に於ても、學に於ても、手腕に於ても、人格に於ても、天下を服するに足らざるや論なし、其耶蘇が十字架に釘きしを見て、戰慄しつゝ散亂したる醜態を觀ても亦た知るべきなり。然るに彼等は間もなく死を決して起ち、鞭たるゝも、牢獄に入れらるゝも、石にて殺さるゝも、敢て之を意となさず、其の舌は兩刃の劍の如く、其言は

電雷の轟くが如く、日々に幾千人を悔改せしめ、遂に亞細亞より歐洲に渡りて主の道を宣傳し、瞬く間に、當時の天下を征服し去らんとするの概を示すに至れる其源因は、抑々何れの處にやある。歴史家は單に稱す。是れ實に不思議なるのみと、而かも吾人より之を觀れば、決して不思議の事にあらず、是れ全く聖靈の能力に因るなり。人若し此聖靈を受くときには、弱も强と變じ、怯も勇と化し、訥も辯となり、鈍も鋭となり、ムーデーの如き無學を以てして、猶ほケンブリッヂ學生の數百人を悔改せしめ得るものとす。

嗟吁今や吾人同志と倶に、日本教會を組織し、將に歐亞を睨んで動かんとす、而かも是れ吾人の能力に待つあるにあらず、全く聖靈の能力に依らんとするものなり。彼れ數人の漁夫と、若干の微弱者すら、猶ほ彼れの如き大業を成す、吾人の前途には光明あるのみ。

神

物あれば名あり、名は人の附するもの、物は自然に存在するもの、是故に名稱は變ずべきも、實物は變ずべきにあらず。茲に一大不可思議物あり、確かに天地萬有の間に存在す、(哲學上の解釋を用ひず、暫く通俗の語に從ふ)、孔子は之を上帝と稱し、ソクラテスは之を『テオス』と呼び、基督は之を天父と說き、マホメットは之を『アラア』と崇め、吾人は之を神と宣べ、各々異樣の名稱を附す、而かも其の指す

ものたるや即ち一なり。

然則如何にして、此の一大不可思議物の存在を識るや。曰く(一)哲理上より絶對若くは實物(アブソリユート)の存在を認めざるを得ざること。(二)萬有の構造(ストラクチヤー)よりこゝに不可思議なる一大心靈の存在を認むること。(三)吾人の本心に顧み、此本心の應對物即ち主宰の存在を認むること、(四)吾人一個を研究し來り、吾人が已に一不可思議なる心靈たるを認むる以上は、更に吾人の本源なる大靈の存在を認めざるを得ざること即ち是れなり。

保羅曰く『夫れ人の見ることを得ざる神の永能と其神性とは、造られたるものにより、創世より以來、曉り得て明かに見るべし、是故に人々推諉るべき樣なし』と(羅馬書一ノ二十)。即ち萬有の構造より觀察して、こゝに神の存在を認むべきを說けるなり。又曰く『凡そ人を審判ると爾人を審判るは正しく己れのこゝの人よ、爾推諉るべき樣なし、

罪を定るなり。そは審判るところの爾も之を行へばなり』と。此は更に本心に對する主宰の存在を謂へるなり。

孔子曰く、鬼神の德たるや其れ盛んなる矣乎、之を視れども見へず、之を聽けども聞へず、物に體して遺すべからず。詩に曰く神の格る度る可らずと。是れ亦た天地萬有間に、一大不可思議物の存在を說くものなり。

子思曰く天の命之を性と云ひ、性に率ふ之を道と謂ひ、道を修むる之を敎と謂ふと。此れ亦人の性にある人道の本源即ち亦た主宰を指せるなり。

更にソクラテスの說明を聽くべし。

一日ソクラテスの弟子にアリストデマスなるものあり、大に誇りて、予れは世人の如くに神(當時の偶像敎の)を拜せず、亦た之に犧牲を捧ぐる如き迷愚の擧動を爲すものにあらずと威張れるを聽き、

ソクラテス靜に之れに問ふて曰く、アリストデマスよ、汝は古今の人物中、如何なる人に最も敬服し、如何なる人を最も崇拜するやと。アリストデマス答へて曰く、詩人としてはホーマル、悲劇の作者としてはソフオクリース、彫刻者としてはポリクリデス、而して畫師としてはユーキジス等なり、曰く然らば又た問はん、それポリクリデスは善く人を刻む、而かも未だ生きたるものを刻みたるを見ず、若しこゝに活きたるものを刻む人あらば、汝は果してポリクリデスより猶遙かに之を崇拜するや否や、曰く固より也、然則又た問はん、汝と予の如きものは、果して誰れの手に由りて成りたる、最初に人を造りたるものは果して誰ぞ、汝はこゝに肖像のあるを見ば、必ずや之を造りたるものあるを知らん、何となれば是れ智能と意匠とに由りて成れるものなるべければなり、試みに汝の目を見よ、汝の耳を見よ、四肢を見よ、五體を見

よ、何んぞ其の巧みに製造せられたるや、而かも汝は之れを偶然に出來たるものなりと思ふやと。アリストデマス此時初めて悟りたるかの如くして曰く、實に然り、予又た疑ひあるを見ず、曰く然則汝は何んぞ神を無視するや、是れ則ち天地の大技術家、則ち神にあらずや。曰く然り、然れども、よしやこゝに神ありとするも、其神たるや餘りに高大に過ぐるが故に、我儕人類の如きものゝ禮拜若くは犧牲若くは役事を要せざるべし、即ち我儕人類の存在の如きには頓着せざるべし、曰く汝は折角汝を製造し、其後絶へず汝を養育し給ふものを執へて、猶ほも汝に頓着し給はざるものと議するを得るか、それ神は高大なるものなりと雖も、又た甚だ詳密なるものなり、知らざるところなく、見ざるところなく、在さゞるところなきものにあらずば、之を眞の神と稱する能はず、曰く然れども未だ予儕が神を見ること能はざるは何ぞや、彫刻者

は予れ我が眼前に其存在するを見る、而も神は之を見る能はざるなり、曰くアリストデマスよ然ば問はん、汝は人の靈魂を見ることを得るや、其れ目は物を視、耳は物を聽き、口は物を味へども、其眞に視るものは眼にあらず、其眞に聽くものは耳にあらず、其眞に味ふものは口にあらず、而して之を爲すものは靈魂にあらずや、而かも靈魂なるものは、汝之を見る能はず、汝之を聽く能はず、汝之を味ふ能はず、風の如く電の如し、而して總じて神性に似たるものは、汝之を見ること能はざるべきが故に、只だそれ理を以て之を看よ、若夫れ理を以て之を看ば、かれ耳目に觸れて變化するものよりも、猶ほ能く明かに之を見ることを得んと。於此乎アリストデマスは遂に神を信じ、且つ之を拜するものと成り了しぬ。

然而して基督敎と儒敎と、ソクラテス敎の外、回敎も、佛敎も、

我神道も、亦た同じく此神の存在を說かざるはなし、其名稱と說明とに於ては、各々異なるものありと雖ども、此不可思議物の存在を說くや、明瞭なるものありと謂はざるべからず。

之を要するに神確かに存在す、而して吾人は理性より之を認めざるを得ざるものとす。然れども吾人は啻に理性より之を認むるのみならず、亦た之を感せざるべからず、更に之を見ざるべからず、即ち智識上のみの神たるのみならず、更に靈的實驗に現はるゝ神たらしめざる可らず。智識上に屬する神は、神學の神、哲學の神、吾人の心靈に觸れざるの神、吾人の宗敎に關せざる神、即ち吾人の父と

し事ふる神にあらざるなり。

然則如何にして此神を靈識すべきか。曰く耶蘇は已に神を信じたりし猶太人間に道を傳へしを以て、保羅の如く神の存在の證據を論ずる必要はあらざりし、乃ち智識方面の神は說かざりし。然れども

其靈的實驗の言行に至りては、殆んど聖書中に充滿す。かれ神を天父と稱することは、敢て耶蘇の專有敎にはあらず、然れども耶蘇は眞にしかく感じたりしなり、而してアバ父よと呼びつゝ神に近きたる情致は、眞に掬すべきものあつて存せしなり。

耶蘇曰く『心の清きものは福なり、其者は神を見ることを得べければなり』と。神を見るとは如何なる意ぞ、啻に理性上より神を認識するの謂ひにはあらず、恰も眼以て物を見る如く、心靈の鏡に此神を寫し奉るを謂ふなり。然則如何にせば神を見ることを得るや。曰く心の汚れたるものは能はず、濁流に月影の寫らざるが如し。只だ清心者之を能す。耶蘇の如きは實に此實驗を有するもの、彼れは屢々山に登り、或は靜處に赴きて祈禱せり、而して其祈禱たるや、此神に訴へ、此神を見、此神と言ひ、所謂る父子の關係を以て、此神に親接したるものに外ならず。然則人問はん、心の清きものにして、

初めて神を見ることを得るとせば、我等心の清からざるものは、終に神を見ること能はざるかと。曰く然らず、濁流も二月明月たゝへ如何なる罪惡を犯したるもの、若くは如何に清からざるものにせよ、若夫れ一旦飜然として其非を悔ひ、今後意を決して善良なる生涯を送らんと欲するものたらば、直に此神を見ることを得べきなり。乃ち耶蘇其人の爲めに一片の譬喩を語りて曰く、

「或人子二人あり、其の季子父に曰けるは、父よ我が得べき身代を我に分け與へよ、父その身代を彼等に分ちたれば、幾日も經ざるに季子その身代を悉く集めて遠國へ旅立せしが、放蕩にして其の所有を皆そこにて費せり、悉く費せし時大なる饑饉その地にありて彼乏しくなり始めければ、往きて其地の或人に身を寄せたり、其人豚を牧ふために彼を野に遣せり、彼豚の食する所の豆莢をもて己が腹を果さんと思ふほどなれど、何をも彼に與ふる人なし、自ら省みて曰けるは、我父の所には食物あまれる傭人の許多あるに、我は飢て死んとす、起ちて我父に往きて曰はん、父よ我天と爾の前に罪を犯したれば、爾の子と稱ふるに足らざる者なり、爾の傭人の一人の如く我を爲したまへと、即ち起ちて其父に往けり、尙遠くありしに其父彼を見て憫み走り往き、其頸を抱きて接吻しぬ、子父に曰けるは、父よ我天と爾の前に罪を犯したれば、爾の子と稱ふるに足らざるなり、父その僕等に曰けるは、最とも美き着物を持來りて之に衣せ、其指に環をはめ其足に履を穿かせよ、又た肥たる犢を牽來りて宰れ、我儕食して樂まん、是れ我が子死て復た生き失ひて復た得たればなり」（路加十五ノ十一—廿三）

然則何人にても飜然悔悟して神に歸らば、此神に迎へられ、此神に抱かれ、此神を父と呼びて、直に父子の關係を結び得べきや知るべきなり。

人更に問はん、此神に歸り此神に抱かれ、此神と父子の關係を結ばゝ、如何なる靈的經驗を得べきやと。曰く或時耶蘇猶太人の宰なるパリサイのニコデモに告て曰く『誠に實に爾に告げん、人もし新に生れずば、神の國を見る能はず』と。ニコデモ耶蘇に言ひけるは、人はや老ひぬれば如何で復た生るゝことを得んや、再び母の腹に入りて生る可けんやと。耶蘇曰く『肉によりて生るゝものは肉なり靈に由て生るゝ者は靈なり。我なんぢらに新に生るべき事を言しを奇しと爲なかれ、風は己が任に吹く爾其の聲を聞けども何處より來り何處に往くを知らず、凡て靈に由て生るゝ者も此の如し』と。

實にや悔改めて神に歸るものは、皆神の聖靈を受け、新に生れた

るの感證を得べし、而して天國の人たることを自覺すべし。其如何にして然るや、何故に然るや、吾人は之を知らず、吾人は只だ風の往來するを感ずるが如く、神の聖靈が我が心靈に觸れて一種活々たる生命と不可言の靈感を得るを知るのみ。

使徒保羅の實驗談に曰く、

アポロのコリントに居れる時、パウロ東の方の地を經て、エペソに來り、或弟子等に遇て、之に曰けるは、爾曹信者と爲りしとき、聖靈を受けしや、答けるは我儕は聖靈の有ることだに聞ざりき、パウロ曰けるは然ば爾儕はバプテスマを受て何に入られしや、答けるはヨハ子のバプテスマに入れられたり。パウロ曰けるは、ヨハ子は誠に悔改のバプテスマを爲し、民に向て我の後に來るもの、即ちイエスキリストを信ぜよと曰へり。彼等これを聞てバプテスマを受けて主イエスの名に入られたり。パウロ手を其上に按ければ、聖靈かれらに臨れり(使徒傳一九ノ一—七。

使徒彼得も亦た其實驗談を述べて曰く、

エルサレムに居る使徒等、サマリア已に神の道を受けたりと聞て、ペテロとヨハ子を彼處に遣す、この二人の者下だりて、彼等が聖靈を受けん爲めに祈れり。蓋は彼等は唯だ主イエスの名に入れられ、バプテスマを受けしのみにて、未だ其一人にも聖靈下らざりしに因る、この時二人の者、手を彼等の上に按ければ、彼等聖靈を受けたり(使徒傳八ノ十四—十七)。

是れ決して虛構揑造の言にはあらず、事實談なり。即ち基督敎會

は今日と雖ども、尙此實驗を繼續し居れり、凡そ眞正の信者たるものは、此靈的感證を有すべきものとす。是れ基督敎の歷史的事實にして、又た基督敎徒の自覺するところのものとす。

其れ然り然れども他敎にも亦た之れなきにあらず、マホメットは屢々神を見たりと云ふ、而して其神を見たるや、恰もモーゼが神を見たると同じかりき。又た彼れは屢々天使と言へり、又た夢に幻に神の啓示を受くること鮮からざりき。ソクラテスの靈識したる神も亦た耶蘇の神及びマホメットの神と異なるところあらざりき。彼れは同じく天使をも說き更に『神聲』なるものゝ存在をも確證せり、而して此『神聲』は恰も基督敎の所謂る聖靈と同物たるものゝ如し。彼れ曰く『予れは至誠至情の眞理に基て立ち、行と智と理に由て進むものなり。然れども予れには尙ほ此外予を導く者あるを覺ゆるなり、是れ即ち『神聲』なり。此神聲は終始予と俱に在つて、予れに避くべき道と

蹈むべき道とを區別せしむ』と。又曰く『予れは市に出でゝ個々の市民に蹈むべき道を敎へたり。然れども未だ曾て多く公共的事務に就て語りたることなし。予れはミリタスが予れを訴へし如く、寧ろ好んで神明的超人間的に關する或物を說きたりしのみ。然れども裁判官よ(此時裁判官を見て)予れは夙に予が心に聲ありて、我が爲すべきことゝ爲すべからざることを敎ゆるものあるを認め居るなり、而して予れは每に謹んで其聲に從ひ居りしが、此者予れに告げて、汝は成るべく公共の事務に嘴を容れず、只だそれ人の神魂に其敎を加へよと云ふを聽けり』と云々。

然則ソクラテスにも亦た此等神に關する靈的經驗ありしや知るべきなり。

孔子曰く天德を予に生ず、桓魋其れ予を如何。又曰く丘の禱る久し矣と。孔子は耶蘇の如くソクラテスの如く、若くはマホメットの

如く神を見て、神と言ふ如き經驗を有せざるものゝ如し。然れども神を祭る神在すが如しと感じ、物に體して遺すべからずと說きたりき。又曰『君子に三畏あり、天命を畏る、大人を畏る、聖人の言を畏る』と、而して天德と云ひ、丘の禱る久しと云ひ、更に君子に三畏ありとて、天命の畏るべきを說きたる諸點より觀察し來れば、孔子も亦た同じく此天即ち此神を感じたるものたるや知るべきなり。

釋迦に就てはこゝに多く語るを要せず。其凡神敎の傾向あるにもせよ、此不可思議なる一大實在を認め、之れに合するを極意と爲し、百般の修養を其一點に集注せしむる樣說きたるを以ても知らるべきなり。

此他われ誰を言はんか、使徒保羅が屢々『聖靈予れに告げて曰く』と宣べ來りて、恰も聖靈が人語を以て保羅に告げし如く感じたる經驗を云ふべきか、使徒彼得がペンテコステ以來に示したる靈的經驗を

言ふべきか、オーガスチンの受けたる、ルーテルの得たる、エドワルド、フヒンニー、ムーデー等の實驗したる不可思議的現象を言ふべきか、恐らくは惟れ日も足らざるべし、否、予輩の如きも、我が三十年の宗敎的生涯に徵し來るときには、此等の靈的經驗は殆んど數るに遑あらざらんとす。否々、吾人は現に今日此靈的經驗に浴しつゝあるものとす。

人或は言はん、是れ迷信にあらざるか、一種の病的現象にあらざるかと、曰く吾人は之を知らず、若夫れ之を病的なりとせば、耶蘇孔子、ソクラテス、釋迦、マホメット皆同じく病的の人たりしと謂はんのみ。若夫れ之を迷信とせは、此等の聖賢は皆迷信の人たりしと謂はんのみ。尤も眞物あれば必ず僞物あり、こゝを以て此間眞僞の區別を要す。或は神を見たりと謂ひ、或は佛を見たりと謂ひ、或は聖靈に感じたりと謂ひ、或は靈示を受たりと謂ふも、其人格を檢

し來るときは、神經質の人、感情一片の人、即ち狂妄者の類か、但しは世を驚かせて、自ら估らんと欲する僞物の類たるものなきにあらず。是れ豈耶蘇釋迦孔子ソクラテスの類ならんや。耶蘇孔子ソクラテスを觀るべし。彼等は感情一片の人に非ず、又た自ら估らんとする類にもあらず。耶蘇は奇蹟を求むるものに答へて、『奸惡なる世は徵候を求む』と謂ひ、之れに道德的山上の敎訓を說きぬ、釋迦孔子ソクラテス是れ皆堂々たる哲學者なり。豈之を狂妄者と同一視すべけんや。然而して彼の僞物には必ず道德の伴はざるを例とす、而かも此れ眞物には道德其物の權化とも見るべきものあつて存するなり。此孔子ソクラテス耶蘇にして、こゝに靈的經驗を語る、豈之を迷信若くは病的現象と同視するを得んや。

アヽ讀者よ疑ふ勿れ、宇宙の間に一大靈物確かに存在す、孔子釋迦ソクラテス耶蘇マホメット皆之を認め。更に之れに合せんと勉め、

而して遂に之れに合し、之れと父子の關係を結び、之れと一心たるに至りたるものとす。彼等が智識的方面より、道德の方面より、更に靈的經驗の方面より、此神の存在を主張するを無視する勿れ。迷信視する勿れ、病的視する勿れ、之を無視し、迷信視し、病的視するものは、適々其人の智識と道德と靈的方面に大缺點あるを示すものとす、更に向上心に乏しく品性の高貴ならざるものあるを示すものとす。吾人豈之を諸君に望まんや。

諸君已に神の存在を認め、靈的經驗の證言を信ずとせんか、次に來るべき問題は、諸君自己が如何にして此神に對して父子の關係を結び、靈的經驗を有する人たるべきやと謂ふこと是れなり。我儕は曰ふ、諸君よ前述の如く、先づ悔改の門より入れよ、即ち過去と現在とに於ける誤れる生涯を悔ひ、今日より神意に從ふべしと決心せよ、然而して若夫れ敢て誤れる生涯を送りたることなしとするも、

此の神を認めざりし以前と、已に神を認めたる今日とを比較し、更に新生涯を送るべしと決心すべし、是れ第一義なり。然而して此第一義にして已に決せば、次には神前に出でゝ祈禱すべし。耶蘇嘗て如何に祈るべきかを其弟子に敎て曰く、

天に在ます我儕の父よ、願くは爾名を尊崇させ給へ、爾國を臨らせ給へ、爾旨の天に成るごとく地にも成させ給へ、我儕の日用の糧を今日も與へたまへ、我儕に罪を犯す者を我が免す如く、我儕の罪をも免したまへ、我儕を試探に遇せず、惡より救出し給へ。云々。

今此祈禱を解釋せば、第一神を讃美する事なり。第二神命の行はるゝ理想國を來らせよ願ふとの事なり。第三身に必要なるものを祈るも可なりとの事なり。第四神に向ふて己のが罪を赦るされんことを祈ると同時に、一切人の罪を免せよとの事なり。然而して最後には、凡ての誘惑に打勝ち、益々正道に進ましめよと祈ること是れなり。尤も此は是れ標準を示せるのみ、一切の祈禱は己のが心願を吐露することなれば、子が其父に訴ふるが如く、何事を祈るも妨げな

し。

保羅曰く何事をも思ひ煩ふこと勿れ、唯だ每事に祈禱を爲し懇求を爲し、且つ感謝して、己のが求むるところを神に告げよ（ピリピ四ノ六）。

雅各曰く爾曹の中、若し智慧足らざるものあらば、かの咎むることなく、惜むことなくして衆人に與ふる神に求めよ、然らば與へられん（雅各一ノ五）

又曰くなんぢら互に過罪を認らはし且病を療るゝことを得んが爲に互に祈るべし義者の篤き祈禱は力ある者なり（五ノ十六）。

然則如何なる處に於て祈るべきか、曰く耶蘇はしば〳〵山に登りて祈れり、又た靜なる處を撰び給ひたるが如し。

聖書に曰く斯くて人々を還しければ祈禱せんとて、密かに山に上り、日暮るゝも獨りそこに在せり（馬太十四ノ二十三）。

又曰く耶蘇昧爽に早く起き、人無き所に行き、そこにて祈禱せりと（馬可一ノ三十五）。

又曰く耶蘇の聲名ますゝ揚りて、許多の人々或は敎を聽かんとし、或は病を醫されんとて集り來れり、耶蘇常に人なき所に退きて祈り給ひぬ（路加五ノ十六）。

耶蘇又た其弟子に告げて曰くなんぢ祈る時に僞善者の如くする勿れ、彼等は人に見られんが爲に會堂や街衢の隅に立て祈ることを好む、われ誠に爾曹に告ん彼等は既にその報賞を得たり、なんぢ祈る時は

嚴密なる室にいり戸を閉て隱微たるに在す爾の父に祈れ然ば隱微たるに鑒たまふ爾の父は明顯に報たまふべし、爾曹祈る時は異邦人の如く重複語を言なかれ彼等は言多きを以て聽れんと意へりと。（馬太六ノ五―七）

勿論人の前若くは會堂に於て祈るも妨げず、衆人の間に座して默禱するも妨げず、歩行しつゝ祈念するも妨げず、然れども要するところ祈禱は靜肅なるところをよろしとす。

然則祈禱の應驗如何を問ふ。是れ前條に述るが如し。神已に父たり。而して吾人已に其子たり。其間何等かの交通あらざるべからざるや勿論なり。即ち放蕩息子の歸りて其罪を謝せしとき、父の之を抱て接吻せし如く、吾人は確かに聖靈に觸れて一種言はれざる感情を得べし。

ジョナサン、エドワルド曰く神に歸りて神に抱かれたる感情は、一種特別の感情にして、此世に生ずる感情と其性質を異にす。其初めて神の前に出づるや、悔恨と苦悶と戰慄と恐懼とに滿ち、口吃し、胸悸し、

手足縮んで殆んど名狀すべからざる暗黑に入るが如き感あり、然れども思切て其罪を懺悔し、自今神に事へて背かざらんと決心し來るや、天地忽ち一變し、萬樹に花咲き、四鄰に清樂聞へ、其身は忽焉として天上に上り、確かに神を我父とし拜し奉るの靈的經驗に入るものとす。而して此時の感情は決して此世に屬するものにあらず、確かに神秘的靈界に屬するものなりと云々。

エドワルドは哲學者なり、敎育者なり、而して自ら之を實驗し、自ら之を立證す。彼れは前述にかゝる諸聖者と其類を同ふす、吾人豈之を疑ふを得んや、否、吾人も亦た確かに此種の靈感に預りたるものとす。諸君よゆめ〳〵之を疑ふべからず、是れ實驗談なり、事實談なり。尤も人の性情により、其感動に急緩あり、其程度に差等あり、之を一概に論ずべきにあらずと雖ども、一種言ひ難き神秘的感情は必ず化心者に伴ふべきものとす（一六一頁祈禱の部參照）。然而して吾人は已に理性より神を認め、已に經驗より神を感證し、已に靈と眞とを以て神を拜し、已に父子の關係を以て神に接し、已に祈禱を以て神と交るに至れる以上は、爰に神の命即ち耶蘇の所謂る父の旨を行

ふことを心掛けざるべからず。世には神を論じ、神を證し、神を讃美し、神に祈禱し、靈的經驗の難有を說くも、父の旨を行ふに於て空なるものあり、父の旨とは何ぞ、即ちすでに論せし如く、善且つ義を行ふことなり。善且美を行ふことゝは何ぞや。禁煙することなるや。禁酒することなるや、安息日を守ることなるや、兄弟相會すれば、直にハレルヤを唱へて祈禱することなるや、若くは或る宗派の主張する誡律を履行することなるや。曰く否否、或宗派のみならず、從來の基督敎が全敎會を通じて守るべしと主張する誡律すら守るに及ばず、吾人の所謂る善且つ義なるものは、即ち『言忠信行篤敬ならば蠻貌と雖ども行はるゝもの』にして、如何なる人に會ふも、『御尤で御座る感服で御座る』と云ふ道を行ひ、如何なる人に會ふも、『あまり感服仕らぬ、あの宗敎家にしてあれで御座るか』と誹らるゝ如き所業を爲さゞること是れなり。即ち普通道德常識的善義を厲行する

こと是れなり。

然則諸君よ、記憶せよ、己に神を識らば、我が第二の信條たる修德の問題、第三の信條たる愛隣の問題の如きは、自然の結果として出で來らざるを得ざるものとす。是故に日本敎會の主張に從へば、如何に熱信喰ふ如きものあるも、如何に有名なる說敎を爲すものあるも、如何に禁煙、禁酒を爲し、又た聖日を嚴守するあるも、世間に押し出して通せざる所業を爲すものは、數ふるに足らざるものなり（コリンタ前書十三章參照）。態々歐米より來れる宣敎師にして、卑吝なるあり、非禮なるあり、クックボーイに爪彈せらるゝものあり、是れ吾人が多年目擊したる事實とす、此等は如何に傳道に熱信なるも、基督信者にあらざるなり。一廉の牧師傳道者にして不義理の借金を拂はず、恬然愧ぢざるものあり、義を缺き信を缺き、友を賣り、人を陷れ、只管己れの名聲をのみ念ずるも、尙ほ基督の愛を說くものあ

り。是れ皆基督信者にあらざるなり。此故に日本教會員たらんものは、人を教ゆる地位に在るものは、勿論の事、凡そ普通の信者にても、苟も其身に非行あり、其心術に不埒ある時は、會員直に之を戒しめ之を責め、勤て地の鹽、世の光たるの資格を養はしめ、世間に押出して『如何にも日本教會員には感服で御座る』との好評を受くるものたらしめざるべからず。吾人は保羅の如く『信仰によりて義とせらるゝ』の主張を取らず、寧ろ雅各の如く『行爲により義とせらるゝ』の主張を重んずるものなり。信仰によりて義とせらるゝものは消極なり、行爲によりて義とせらるゝものは積極なり、信仰によりて義とせらるゝものは利己のみ、行爲によりて義とせらるゝものは、人の爲めを圖り、又た世の益を爲す。尤も德行に程度あり。神は吾人に聖賢を誣ひず、而かも吾人の覺悟は世間の普通に認むる善且つ義に向て猛進するに在り。斯くて一個人の修德より移りて更に社會的なる愛

隣の實行に於ては、是れ日本教會が、第三の信條として最も今日に努力せんと欲するもの、彼れ長袖紫衣を飜へして肥ゆるもの、此れ破褸臭襤を纏ふて餓ゆるもの、彼れに何の德ありてか然る、此れに何の罪ありてか然る、此れは營々兀々牛馬と軛を同ふして苦み、彼れは揚々翩々燕樂を肆にして笑ふ。此れに何の功ありて然る、彼れに何の咎ありて然る、吾人は物心づきしより以來、常に此疑問を懷て解く能はず。是れ人爲なるか、天意なるか。乃ち耶蘇はサマリタンの譬喩を引て、之れに對して父の旨のあるところを教へ給へり、即ち左の如し。

爰に一個の教法師あり、起て彼を試み曰けるは、師よ我れ何を爲さば、永生を受べき乎、イエス曰けるは律法に錄されしは何ぞ、爾いかに讀むか、答て曰けるは爾心を盡し、精神を盡し力を盡し、意を盡して主なる爾の神を愛すべし亦己の如く鄰を愛すべし。イエス曰けるは爾の答へ然り、之を行はゞ生くべし。彼みづからを罪なき者に爲さんとてイエスに曰けるは、我鄰とは誰なる乎、イエス答て曰けるは、ある人エルサレムよりエリコに下るとき、强盜に遇へり、强盜その衣服を剝取て、之を打擲き瀕死にして去りぬ、斯る時に、或祭司この路より下しが、之を見過にして行けり、又レビの人も此に至り進み見て過行けり、

サマリアの人旅して此に來り、之を見て憫み、近よりて油と酒を其傷に沃し、これを裏て己が驢馬に乘せ、旅亭に携へ往て介抱せり。次日いづるとき銀二枚を出し館主に予て此人を介抱せよ、費もし增さば、我かへりの時なんぢに償ふべしと曰へり、然らば此三人のうち誰か强盜に遇し者の鄰なると爾意ふや、彼いひけるは其人を矜恤たる者なり、イエス曰けるは爾も往て其の如く爲よ（路加十—二五—三七）。

見よ隣を愛するとは、即ち此の貧弱無告の民を救ふことなり、於此乎吾人日本敎會員たるものは、直に所謂る社會問題に入らざるべからず、然則吾人の社會問題に關する意見、否、直に社會問題を捉へて活動せんと欲する意見と計畫とは如何、曰くこれ更に『愛隣』の部に於て說くべし。

嗚呼吾人が神に就て、又た神の旨に就て語らんと欲するものは大略右の如し、即ち一言以て之を掩へば、曰く第一、神と父子の關係を結ぶこと。第二、此神の旨を此世に行ふこと即ち是れなり。

祈禱

新神學と祈禱と並行せざる如く思ふものは、大なる誤見である。然し又た此誤見を釀したる原因なきにしもあらず。我國で新神學を唱へ始めたるものは、先づユニテリアン派、襲で普及福音派である。然るに此兩派とも、神學の議論と倫理の方面に重きを置き、實際宗敎の本部たる祈禱などを等閑に附して居た傾向があつた。且つ祈禱の說明につきても、多くは主觀的に之を解し、客觀的に解するもの

を迷信の如くに謂ひ做し、一切の奇蹟を否認するかの如く見へたこともあつた。吾人は神學に於てユニテリアン派若くは普及福音派と一致するところの多きものである。然し奇蹟を信じ、又た客觀的に祈禱を解し、頗る此祈禱に重きを置くことに於ては、彼等と趣きを異にして居る。否、此祈禱に重きを置て居ると云ふことは、我が日本教會が僅かに有する七箇の信條中に特筆大書せらるゝを以ても知るべきである。然則如何に祈禱を解するか、吾人は父なる神を信ずるものである、而して已に神が父にして、我等が其子なりとせば、其間交通の道のあらざるべからざるや論なきである。祈禱は神と交通するとである。又た已に交通すと云ふからには、其實驗のあらざるべからざるや、是れ亦た勿論の事なり。然則其實驗は如何、曰く此實驗を有するや否やを以て信者と未信者とを分つべきものである。即ち此實驗の有無が信者と未信者とを別つ分界である。使徒保羅が

或地方の基督信者に向ひて、汝聖靈を領けたることあるやと問ひしとき、聖靈のあることだも知らず、乃ち未だ聖靈を受けたる實驗なしと答へたるにより、保羅祈りつゝ其人の頭上に手を置きしに、聖靈直に其人に降れりと聖書に記されて居る。然則聖靈其人に降れりとあるは、如何なる心持になりたるを云ふや、曰く從來の非行若しくは罪惡を悔ひ、眞の道に戻りて、一生を送らんと決心し、其決心を神に訴るとき、恰も放蕩息子が、其慈愛の父に抱かれて、汝の罪赦されたり、能くこそ歸り來つれと、言はれたる如く感じ、感謝と喜悅とに溢るゝ如くなり、太甚しきは其場に倒れて泣き伏すに至るもの、之を名けて聖靈降れりと云ふのである。尤も人の性情により て、其感動に差等あり、其狀態に種々あるも、要する所は、悔改と發心とによりて惹起さるゝ祈禱によりて、神に訴ふるとき、右の如き得も言はれぬ難有き心を授かるに至るの靈的經驗を謂ふのである。

然而して吾人は之を以て外部より來る神の靈に觸るゝによると信ずるものなるを以て、啻に主觀的に祈禱を解するものでなく、又た客觀的に解するものたることが分るであらふ。

然而して已に聖靈を領けて神の子となりたる以上は。毎朝毎夜若くは日に幾度となく祈禱を以て神と交はることであるが、常に神の聲を聽き、常に神の姿を拜し、常に神に愛撫せられて居る感想が湧き來りて嬉しくて堪まらぬものである、尤も時としては疲れたる如く、倦みたる如く、祈らんとする心も起らず、よし無理に祈るも、何んとなく空を擊つ如き心地を爲し、我れ訴へども神答へ給はず、我媚ぶれども神笑み給はず、誠に氣持の惡きことのあるものである、かゝるときは、靜に坐して反省せねばならぬ、或は情慾に負けて罪を犯さんと欲しつゝあるときならん、或は樣々の煩悶に襲はれて、心を之れに奪はれ居ることもあらん。左らば其時こそ眞に祈禱を要

する時なれば、罪を犯さんと欲することを發見せば、更に大悔して再び神の赦を受くべく、煩悶いよ〳〵甚しきに至らば、いよ〳〵之を神に訴へ、一切を神に任せて休慮すべし、神は父なり、堪へ難き重荷を負はせ給はじ。若夫れ固き信仰を以て、絶へず神に訴へ居らば、やがて汝の胸中に清風起り、汝の頭腦に光明入り、更に汝の上に聖靈降り、汝をして感泣の情に堪へざらしむべし、是れ祈禱の應驗なり。

然而して吾人は啻に精神上に關するのみならず、肉體上若くは物質上に關する祈禱の應驗をも信ず、雅各書第五章十四節に曰く、『爾曹の中、誰れか病めるものあるか、あらば、敎會の長老等を招くべし、彼等主の名によりて其人に膏を沃ぎ、之れが爲めに祈らん。夫れ信仰より出づる祈禱は病者を救ふべし』と。吾人は熱信を以て、祈るときには、或る心靈上の理法によりて、病者を癒し得べしと信ず

るものである、而して是れ基督教の初代より唱るところである。耶蘇は又た祈るべきことについて教へて曰く、『天に在す我等の父よ願くは我等に日々の糧を與へ給へよ』と云々。是れ物質につけるものも祈るべしとの意である。

スポルジョンは嘗て孤兒院の爲めに祈りて、奇蹟的寄附を得たことあり、吾師澤山保羅も亦た其經驗あることを物語り居られた。乃ち祈禱はひとり精神上にのみ關せず、身體に關し、物質に關するものをも含むなりとは、是れ吾人の主張にして、又た耶蘇の教へたるところである。

然り然れども祈禱の最高巔に位するものは、悔改の時に叫ぶ其ではない、煩悶の時に訴る其ではない、肉につき物につきて願ふ其ではない、父子相一致する喜悅にあるのである。耶蘇には悔改の祈禱あらざりしが如し、煩悶の時の祈禱もあらざりしが如し、若し之ありとせば、ゲセマチーの公園の其れのみである、然し父子相一致す

る底の祈禱は、其常に悅んで從事せられたところである。耶蘇曰く父の外に我れを知るものなく、我れの外に父を知るものなしと。世人は我れを知らず、其弟子すら我れを知らず、所謂る天下知己なきの時に當り、獨り神に對して其情を訴へ給ひし當時の感想如何ぞや。神は耶蘇の慰籍なりき、否、其生命なりき。左れば己れを知り得ざる衆俗を離れて、獨り窃かに山に登り、其の志を神に訴へ、其情を神に合せしめ、神の前に出でゝ、アバ父よと祈り給ひしとき、耶蘇の快感果して如何なりしぞや。予も亦た嘗て一日函嶺の絶頂に登り、天地に俯仰して永遠を想し、綠草に座して萬有一如を觀ぜしとき、偶々蝴蝶の翩々然として來たるあり。我れ時に神に入れり、於此乎蝴蝶を我れの妹子の如く感じぬ。野花紅唇を開いて咲きぬ。我時に神に合せり。於此乎野花や我れの愛兒の如く思はれぬ。我れ初め神に祈りつゝありし、而かもいつしか神に入り神に合して。我れ神た

るか、神我れたるか、我れは之を辯せざるに至りぬ。使徒保羅が第三の天に上れりと云へるもの、蓋し此境涯を指せるのである。彼れ曰く『此時我れ肉體の内に在りしか、肉體の外にありしか、我れ知らず、神知り給ふ』と。已に形骸の有無を辯せず、其融和合一の極致や知るべきである。祈禱の上乘は蓋し此上あるべからず。祈禱に關する吾人の實驗と解釋やそれ此くの如し。吾人神學に於ては極めて進歩的である、然れども祈禱に關する信仰の如きに於ては、古人より傳はれる宗教的經驗を重んじ、此中に不朽の道と宗教の大生命を發見するものである。

不思議の現象と我信仰の立場

心靈的現象を研究する結果として、世に不思議の現象の存在することは、最早や否むべからざるものとなりぬ、而して此の不思議の現象は、神佛の起すものか、惡魔の生ずるものか、人靈の爲す業か、狐狸の惡戯か、こは未だ知ることを得ず。何れ研究の結果として、何等かの説明を與ふるに至るべしと雖ども、こゝに吾人をして此等の現象と我信仰の立場に就て、少しく語るところあらしめよ。

基督教に於ては、此不思議の現象を、神と天使と惡魔の三者に歸するものゝ如し。舊約書には神が種々の奇蹟を行ひ、天使が種々の示現を爲し、惡魔が色々の動作を爲したる如く記載せらる。先づ劈頭には、アダムエバの物語に就ても右三者の權化を見、其れより創世記を通じて出埃及記に至り、利未記より、民數記に至り、民數記より申命記に至り、申命記より各豫言者の書に至るまで、凡そ神の啓示と天使の出現と、惡魔の動作の記載せられざるところは、殆んど罕れなり。新約書に於ても、耶蘇の降誕より、其の傳道時代に及び、終に其死に至るまで、是れ亦た神と天使と惡魔との現象に充滿すとも謂つべきなり。其れより使徒時代に至りて之を見るも、耶蘇の復活より喚起されたる使徒等の行動には、殆んど奇蹟の伴はざるものはなく、『ペンテコステ』に於けるペテロの活動より、メリタ島に於けるポーロの振舞に至るまで、盡く不思議の現象を以て始り、不

思議の現象を以て終るものにあらざるはなし。師父時代に至りては、奇蹟を好む猶太人より、智識を好む希臘人に移り、神學の議論勃興し、宗教は神秘を離れて理窟に入り、從つて奇蹟の如きは、以前の如く持囃さるゝに至らざりき。然れども宗教は理窟のみにて活くるものにあらず、こゝを以てやがて神學が統一せられて、羅馬教の全盛となり、所謂る中世紀に入り來るや、此奇蹟的教理と其現象とは、更に到るところに尊重せられぬ。彼れ聖バルナルドの如きは、聖人なりき、德人なりき、決して幻術を衒ふの賣僧にてはあらざりき、而かも奇蹟を信じ、奇蹟を行ひ、此名僧の家には、目の開きたる瞽者の杖、腰の立ちたる跛者の車などを以て滿され居たりと傳へらる、乃ち不思議の現象が、更に基督教界に行はれ來りしを見るべきなり。

其後十字軍は、此不思議の現象に大打擊を與へぬ。當時歐洲の基督教徒は、眞實に奇蹟を信じ、否、現に奇蹟を目擊し居るものから、

神の力ならば、エリコの城も崩るべしと確信して土耳其人に向へり。聖バルテルド自身も、亦たしかく信じて十字軍に從ひぬ。然れども其信仰は失望と變じ、奇蹟は畢に行はれざりき。宗教改革時代には、更に大なる打擊を奇蹟に與へぬ。當時ルーテルは羅馬に到りて、賣僧等が人爲的に不思議の現象を示して、衆俗を迷はすを見るや、憤然として歸り來れり。又た文藝復興の餘響として基督教を道理的に解釋し始むるや、神秘的宗教若くは奇蹟宗教は排斥せられぬ。日本に來りたる『ゼスイト』宗は、此新教に反對して出で來りしものなるが故に、幾分か奇蹟的宗教を傳へしものゝ如し。然れども概して之を謂ふときには、新教の起りし以來、基督教は益々道理派に擅領せられ、奇蹟的方面は、日耳曼に起りたる『レショナリズム』を經て殆んど致命傷を負はされたる感あらしめぬ、之を今日までの歷史とす。

吾人は「不朽の道」にも述たる如く、聖書に記載せらるゝ一切の奇蹟

を信ずるものにあらず、此間には、譬喩的のものを現實的のものとなしたるもあり、通常の出來事を奇蹟的に記載したるところも亦た尠かずらと信ずるものなり。然れども彼れ聖書に記載せらるゝ一切の奇蹟を否定することの無理なるを知る、更に千九百年間の歷史に現はれたる事實を否定するの不可能なるを知る。於此乎看よ、今や更に此方面の復活を見んとするなり、即ち心靈的現象の研究より、更に神秘的に向はんとするなり。尤も茲に一大注意を促し置かざるべからざるものあり。前述の如く、聖書には此等不思議の現象をば、神と天使と惡魔との三者に歸しぬ、然れども其間吾人の恐るべく、拜むべく、崇むべきものは、彼れ天使より來るものにあらず。惡魔より來るものにあらず、唯り神より來るものに限る事を忘るべからず。又た聖書には之を記載せずと雖も、凡そ此等の現象に就ては右三者の外、或は人の生靈死靈の作業にかゝるものあるや亦た未だ知

るべからず、或は狐狸か天狗か、但しは何等か不思議なる靈物の作業にかゝるものたるや、亦た未だ知るべからず。然れども凡そ『神』を信ずるものたらんには、一切此等の現象に魅せらるべきにあらず、若くは迷はさるべきにあらざるなり。たとひ如何なるものが如何なる現象を以て向ふとも、吾人は『神の力』に據りて、直ちに之を消滅退散せしむべきものとす。否、吾人は神の靈に由り、却て我れより奇蹟を行ひ、我れの奇蹟力を以て、彼れの奇蹟力を壓倒し得べしと信ずるものとす。古昔アーロンモーゼと共にパラオの前に立ち、其杖を投じて蛇と爲せしに、パラオに屬ける魔術者も亦た杖を投じて蛇と爲しぬ、而して其奇蹟を行ひしことは同じかりしも、魔術者の蛇はアーロンの蛇に呑まれぬと記載せらる。又たポーロが傳道せしとき、魔術を行ふもの、保羅の奇蹟に壓倒せられ、悉く其の所有の魔術書を燒き棄てたりとも記載せらる。吾人はどこまでも彼れアーロ

ンと此れポーロの態度を以て、此等不思議の現象界に臨まざるべからずと信ず。

之を要するに、惡魔とは何物ぞ、天使とは何物ぞ、人類の靈、鳥獸蟲魚の靈、或は木靈山靈もあるべし、之れ果して如何なる物ぞ。此等は古昔に信ぜられ、近世に於て否定せられ、今や更に研究物たらんとす、之れ果して何物ぞ。實在物か非か、不思議の現象の存在丈は、已に確然爭ふ可らざる事實となりぬ。然れども此不思議の現象なるものは、果して何物に由て惹起せらるゝものか、何等の法則に支配せらるゝものか、尙ほ未だ之を知ることを得ず、是れ吾人が心象會を起すゆえんとす。然れども こゝに予輩一個の所信を謂はしむれば、吾人は『神』を信ず、而して此神は不思議の力を現はし給ふものとす。吾人は吾人の靈魂の存在を信ず、而して此靈魂には不思議の力あるものとす。吾人は天使と稱すべきか、惡魔と稱すべきか、將

た狐狸の霊と稱すべきか、其名稱に於ては、如何に變化するも妨げずと雖ども、已に彼れ不思議なる神と、此の不思議なる人霊の存在を信ずる以上は、確かに此他にも尚ほ種々なる霊物の存在を信せざるを得ず、而して此等の霊物が、吾人に向ふて、種々の現象を呈し來る者たるを信せざるを得ず。然れども其の如何なる霊物が存在して、如何なる現象を呈するとも、吾人眞神を信ずるものたらんには、一段高く彼等の上に出で、決して彼等に支配せられず、却て彼等を支配すべき地位に立つべきものたることを主張せんと欲するものなり。

道と宗教

老子曰く道の道とすべきは、常道にあらず、名の名とすべきは、常名にあらず、無名は天地の始、有名は萬物の母と。道とは何ぞや、道は有形に通じ、無形に通ず、即ち日月星辰山川草木、人畜蟲魚、石瓦糞土に至るまで通せざるところなし、大塊の天に動き、微分子の物に動く、山の峙へ、水の流れ、花の開き、蝶の舞ふ、皆此道に據るものなり。然れども茲に論ぜんと欲するところは、天地萬有の

間に動く道にはあらで、專ら人生間に動くところの道を謂ふなり。然則道の道とすべきは常道にあらずとは何んの意ぞ。曰く道なるものは廣大無邊なり、無限無窮なり、是故に如何に說明を費すとも、有限者(ファイナイト、ビーイング)の能く說き得べきものにあらず、如何に識り得たる如く誇ることも、人智の識り盡し得べきものにあらず、人智を以て說明する道なるものは、人智の有限なる如く有限なり、而して已に有限なり、是故に無限の道を說明し得べき理由なきなり、已に道と名くことすら不當なり、何んとなれば、無限の道は、有限者の製造物たる文字若くは言語に乘るべき性質のものにあらざればなり。曰く孔孟の道釋迦の道、ソクラテスの道、耶蘇の道と、是れ皆誤れるの太甚しきものなり。道は孔孟の製造したるものにあらず、釋迦、ソクラテスの製造したるものにもあらず、若くは耶蘇基督の製造したるものにもあらざるなり。彼等は唯だ道の存在を說きたるのみ、唯だ道の或

部分を說きたるのみ、即ち道は彼等よりも大なるものなり、彼等の自覺と說明との中に包括せらるべきものにあらざるなり。然而して已に誰某の道と謂ふ以上は、此道已に不完全のものたり。何んとなれば、不完全のものゝ認めて道と爲したるものは、已に不完全の性質を帶ぶるものなるを以てなり、即ち不完全より完全に赴くべき性質、即ち說明に於て易るべき性質を有するものなるを以てなり。故に曰く人の道として傳ふるものは常道にあらずと。於此乎吾人は謂ふ、道は無限無窮、不朽不易のものなるが故に、凡そ誰某の道と名づくるものは常道にあらず、寧ろ誰某の敎と謂ふを以て至當と爲すと。

然則宗敎とは何ぞや、曰く宗敎とは此道の說明に過ぎず。即ち神人聖人若くは佛陀の敎なるものは、即ち無始無終に存在する此の道の或部分を說明するに過ぎず。故に已に宗敎と名くる以上は、直

に其物の不完全なることを示すものとす、而して已に不完全なり、故に進歩發達すべき性質を有するものとす。於此乎數千年以前に說かれたる宗敎を完全無缺のものと信じ、我れは佛法を信ず、我れは儒敎を信ず、我れは基督敎を信ずとて、專ら未開時代に現はれたる宗敎に隷屬し一歩も其上に出づる能はざるものゝ如きは、愚の極なり。斯く謂へばとて、吾人は佛法儒敎若くは基督敎を愚視するものにはあらず、又た釋迦孔子、基督等を輕視するものにもあらざる也。釋迦、孔子、基督は確かに不易の道の或部分を認めて之を說きたるものなり、故に其敎は千載の後猶其光輝を放ちつゝあるものとす、否、無窮に不廢の價値を顯はすべきものとす、而して數千載の後に生れたる吾人は、仰で其識と德とに服し、之を神とし之を佛とし之を聖人として崇め奉らざるを得ず。然れども畢竟するところ吾人は彼等を以て道と爲さず、此道を敎へたるものに過ぎずと爲すが故に、

主とするところは數千載以前に生れて地上に衣食したる人骸其物に事へず、彼等の敎へたる道其道に事へんと欲するものなり、基督信者は曰く、釋迦は道を敎へたるものなり、孔子は敎を說きたるものなり、然れども基督は道其物なり、何んとなれば基督は道を說くとは宣はず、我れは『途なり、眞理なり、生命なり』と言へり、是れ基督敎の尊きゆえんにして、地上の敎と自ら其趣を異にするゆえんなりと。然れども基督如何にして道たるを得るや、道は無限なり、無窮なり。而して基督は有限にしてマリアの子なり。或は謂はん、基督は神の權化にして神なりと、然れども已に人と生れたる以上は神たる能はず。其靈を神なりと謂ふとも、已に臭骸を抱て出づ、之を無限無窮の神と同一視すること能はざるや勿論なり。加之吾人今日より釋迦、孔子、基督の說きたる道なるものを見るに、或者は不磨の眞理、不朽の道なるも、或者は時代の思想に支配せられ居り、今日

に於ては笑ふべき教となりたるもの亦た無しとせず。此故に今後に於ける吾人の着眼は、此等の神人聖人若くは佛陀の說きたる教を根據として、猶ほ其上に吾人人類が數千年間歷史を通じて、發明し若くは實驗したるものを之れに加へ、益々進んで此道の未だ顯れ居らざる部分を發見し、日々に進んで此道を學び、此道を明かにし、此道を味ひ、此道に合するを勗むるに在るのみ。故に曰く吾人の宗教は、人を目的とせず道を目的とするもの也と。

宗教の各方面

宗教本領

宗教の極意は、神に合するに在り。神を認め、神に祈り、神に交り、遂に斯神の子たるの自覺に入り、恒に此神に愛せられ、此神に導かれ、時としては斯神に叱責せられ、若くは懲罰せらるゝことあるとも、決して見棄てらるゝことなく、永生を期して漸々斯神に合し行くもの、之を眞の宗教家と謂ふ。左れば此宗教家ほど、世に愉